箱　崎　65

－箱崎遺跡第 96 次調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1458 集

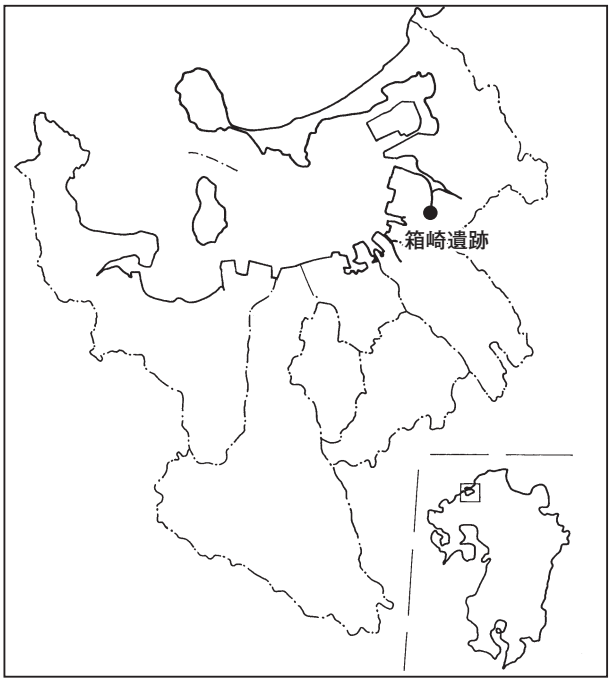
２０２２

福岡市教育委員会

箱　崎　65

－箱崎遺跡第 96 次調査報告－

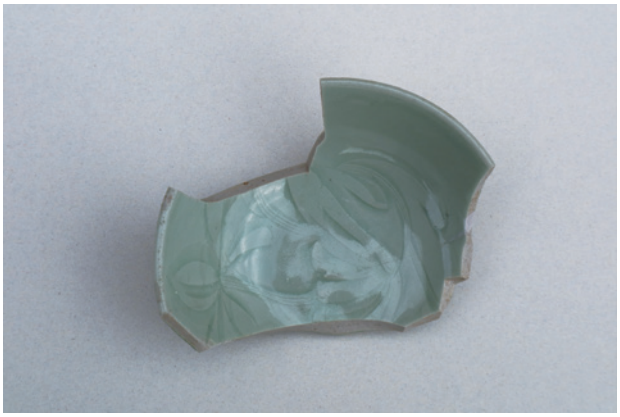
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1458 集



2022

福岡市教育委員会

1.SE02 出土青磁香炉 .SE03 出土青磁香炉 / 小碗 / 杯



2.SK45 出土青磁小碗

3.SE55 出土青磁小碗

4.SE15 出土陶器犬

5.SX34 出土白磁人物像

序

福岡市には、豊かな自然と、文化遺産がのこされています。地理的位置から、古くから対外交渉の拠点の一つとして大きな役割を担ってきました。

これら先人の遺産を保護し未来へと伝えていくことは､私たちの重要な務めです。

福岡市教育委員会では、開発によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存、出土遺物などの活用に努めています。

本書は、共同住宅建設に伴い、令和元年 6 月から 9 月にかけて発掘調査を実施した箱崎遺跡第 96 次調査の成果を報告するものです。遺跡のある箱崎は式内社筥崎宮の門前町として、さらには古代末から中世にかけて対外交渉の拠点として大きな役割を果たしました。今回の報告は筥崎宮周辺区域の調査で、調査成果は対外交渉史を解明する上での一助になるものと考えます。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から本書の刊行に至るまで、大英産業株式会社をはじめ、関係者の方々からご理解とご協力を賜りましたことに対し、こころからの感謝の意を表する次第です。

令和 4 年 3 月 24 日

福岡市教育委員会

教育長　星 子 明 夫

例　言

1　本書は福岡市教育委員会が共同住宅建設に伴い、福岡市東区箱崎１丁目 2928 番、2929 番 1(地番)で発掘調査を実施した箱崎遺跡第 96 次調査の報告である。

2　本書で報告する調査の細目は下表のとおりである。

調査番号	遺跡略号	調査対象面積	調査面積	調査期間
1924	ＨＫＺ－96	939.37㎡	448.43㎡	2019 年 6 月 3 日～ 9 月 21 日

3　本書に掲載した遺構の写真撮影・実測は調査担当の佐藤一郎、基準点測量は技能員の藤野雅基が行い、製図は整理補助員の鳥井幸代が行った。

4　遺物の実測は担当の佐藤の他、技能員の立石真二（石製品）・林田憲三（土製品・金属製品)、製図は佐藤・鳥井・立石が行った。

5　金属製品の保存処理・X 線写真撮影は埋蔵文化財センター上角智希・藤崎彩乃が行った。

6　遺物の整理は整理作業員の鳥井・甲斐田嘉子が行った。

7　遺構は 2 桁の通し番号を用い、遺構の種類に応じて SD（溝)、SE（井戸)、SK（土坑）の略号を番号の前につけた。

8　本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。

9　本書の執筆、編集は佐藤が行った。

本文目次

Ⅰ　はじめに
　1　　調査に至る経緯…… 5
　2　　調査の組織…… 5
Ⅱ　遺跡の位置と環境…… 5
Ⅲ　調査の記録
　1　　調査の概要…… 8
　2　　遺構と遺物
　　検出遺構…… 8
　　出土遺物…… 17
Ⅳ　小結…… 31

挿図目次

第 1 図　箱崎遺跡と周辺の遺跡（縮尺 1/25000）…… 6
第 2 図　箱崎遺跡発掘区域図（縮尺 1/8000）…… 7
第 3 図　箱崎遺跡第 96 次調査発掘地（縮尺 1/1000）…… 7
第 4 図　箱崎遺跡第 96 次調査遺構配置図（縮尺 1/125）…… 9
第 5 図　掘立柱建物実測図（縮尺 1/100）…… 10
第 6 図　井戸実測図 1（縮尺 1/60）…… 11
第 7 図　井戸実測図 2（縮尺 1/60）…… 13
第 8 図　土坑実測図 1（縮尺 1/40）…… 14
第 9 図　土坑実測図 2（縮尺 1/40）…… 15
第 10 図　土坑実測図 3（縮尺 1/40）…… 16
第 11 図　井戸出土遺物実測図 1（縮尺 1/3）…… 18
第 12 図　井戸出土遺物実測図 2（縮尺 1/3）…… 19
第 13 図　土坑出土遺物実測図 1（縮尺 1/3）…… 20
第 14 図　土坑出土遺物実測図 2（縮尺 1/3）…… 22
第 15 図　土坑出土遺物実測図 3/ 土壙墓出土遺物実測図 1（縮尺 1/3）…… 23
第 16 図　土壙墓出土遺物実測図 2/ 溝・Pit 出土遺物（縮尺 1/3）…… 24
第 17 図　Pit・包含層出土遺物実測図（縮尺 1/3）…… 27
第 18 図　出土土製品・金属製品実測図（縮尺 1/3・1/2）…… 28
第 19 図　出土石製品実測図 1（縮尺 1/3）…… 29
第 20 図　出土石製品実測図 2（縮尺 1/3）…… 30

表 目 次

第 1 表　銅銭一覧表 …… 28

図 版 目 次

図版 1　1. 箱崎遺跡第 96 次 A-1･2 区全景（北東から）
2. 箱崎遺跡第 96 次 B-1･2 区全景（北東から）
3. SE06･07 井戸（南東から）
4. SE03 井戸（北西から）
5. SK11 土坑（東から）
6. SK12 土坑（東から）
図版 2　1. SE15 井戸（東から）
2. SE15b 井戸枠（東から）
3. SE30 井戸（北西から）
4. SE30 井戸枠（北から）
5. SE31 井戸枠（北から）
6. Pit95 土層（北から）
7. SE07 井戸（西から）
8. A-1 区柱穴群（南西から）
図版 3　1. SA18（北西から）
2. SK14 土坑（北から）
3. SE16 井戸（北東から）
4. SK14 土坑下面（北から）
図版 4　1. SE04 井戸（北西から）
2. SE01 井戸（北西から）
3. SE06 井戸（西から）
4. SE03 井戸（西から）
5. SK10 土坑（南から）
6. B-1 区全景（北東から）
7. SE42 井戸（北から）
8. SE33 井戸（南東から）
図版 5　1. SX34 土壙墓（北西から）
2. SX34 土壙墓完掘状況（北西から）
3. SE48/55 井戸（南東から）
4. SE38 井戸（南東から）
出土遺物

Ⅰ　はじめに

1　調査に至る経緯

2019（平成 31）年 2 月 5 日、大英産業株式会社から本市に対して東区箱崎 1 丁目 2928 番、2929 番 1（地番）における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会文書（30-2-1067）が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの箱崎遺跡の中央に位置する。埋蔵文化財課がこれを受け、同年 2 月 18 日に駐車場部分で確認調査を行った結果、地表下 0.9m 以下で遺構が確認された。申請者と埋蔵文化財は文化財保護に関する協議をもったが、申請面積 939.37 ㎡の建物部分と立地駐車場部分 448.43 ㎡を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。調査は同年 6 月 3 日から 9 月 21 日まで行われた。令和 3 年度に整理・報告することとした。

2　調査の組織

発掘調査委託　大英産業株式会社

発掘調査受託　福岡市

発掘調査（令和元年度）

福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課

課長	菅波 正人
調査第 1 係長	吉武 学
事前審査担当	田上 勇一郎（主任文化財主事）
	朝岡 俊也（文化財主事）

発掘調査

佐藤 一郎（主任文化財主事）

資料整理（令和 2･3 年度）

福岡市経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課

	菅波 正人
	本田 浩二郎
事前審査担当	森本 幹彦（主任文化財主事）
	山本 晃平（文化財主事）

資料整理

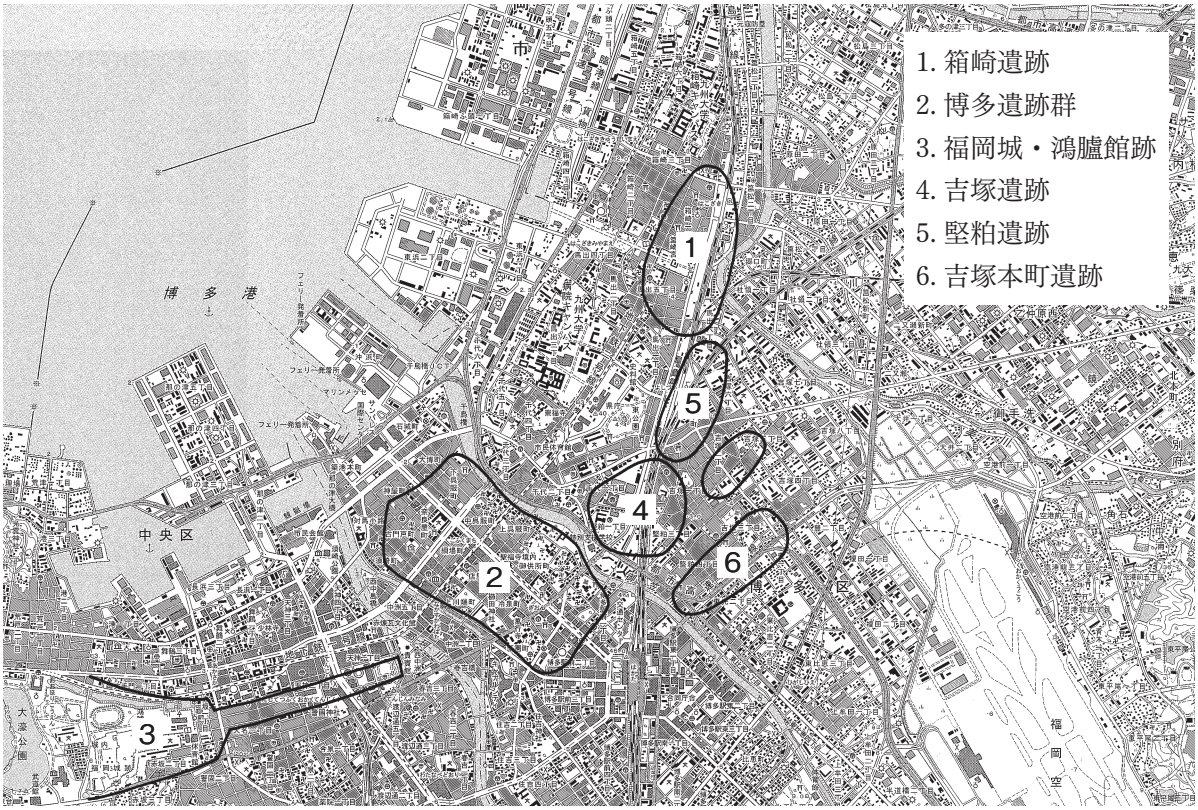
佐藤 一郎（文化財主事 / 再任用）

調査・整理の庶務は文化財活用部文化財活用課の松原加奈枝（令和元年度）、井手瑞江・内藤愛（令和 3 年度）が行った。また、施主の大英産業株式会社、施工の中村建設株式会社、地元箱崎 1 丁目町内の方々のご協力により、箱崎遺跡第 96 次発掘調査、報告書作成にまで至ることができたことに対し心から謝意を表する。

Ⅱ　遺跡の位置と環境

調査地は箱崎遺跡の南東、第 21 次調査地の南西に隣接する。箱崎遺跡は福岡平野の東部、多々良川水系の宇美川河口部左岸に位置し、博多湾岸に沿って形成された古砂丘上に立地する。式内社筥崎宮境内を中心とする東西 0.6km、南北 2.2km の範囲に展開する。西側は博多湾に臨み、東側は宇美川の氾濫により浸食を受けている。砂丘の南端については押さえられていない。標高を下げながら更に伸び南に位置する吉塚本町遺跡へと続く。遺構面は当時の海岸線に沿って帯状に分布する砂丘や砂州でつくられた第四紀層上部の箱崎砂層上面で確認されている。

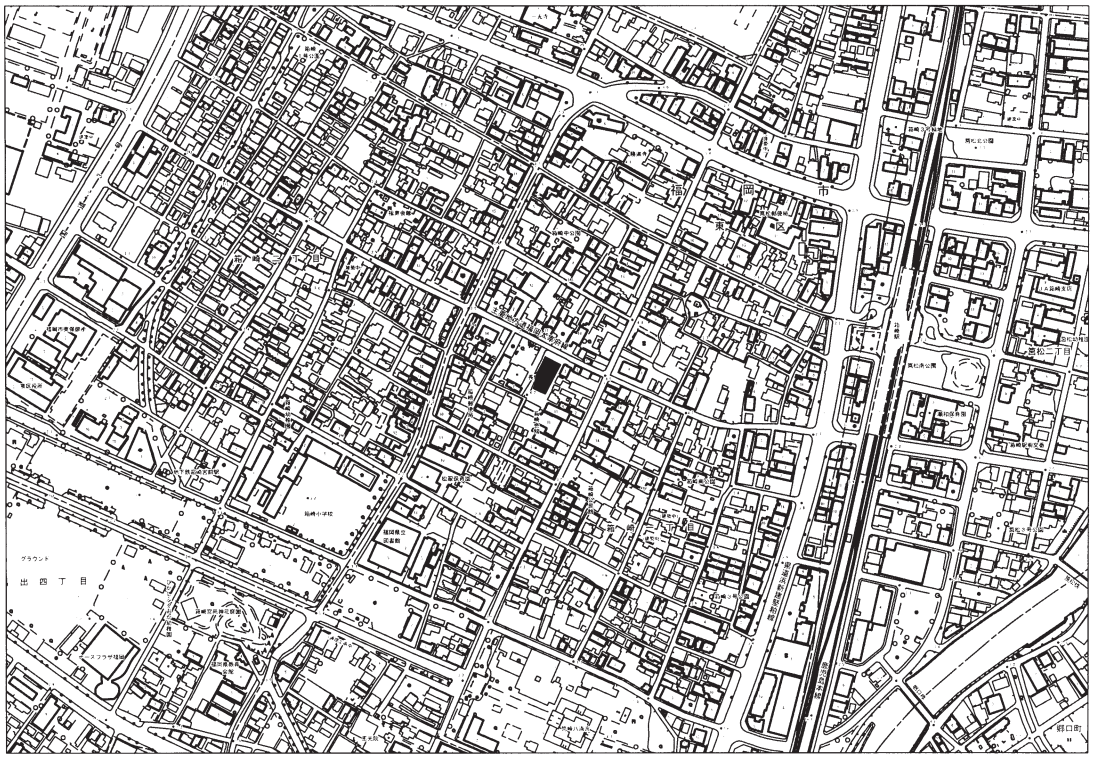
箱崎遺跡の中心には、筥崎宮が位置する。箱崎遺跡の消長を語る上で、中心となる区域である。『筥崎宮縁起』によると、筥崎宮は延長元年（923）に大分宮（福岡県飯塚市）より遷座したとされる。対外交易に意欲的な大宰府官人の思惑が背景にあったとされる。筥崎宮の名は『延喜式』神名帳〔延長 5 年（927）成立〕には八幡大菩薩筥崎宮一座 名神大と見える。尊名から遷座の初めより神仏習合の形態をとっていたことが察せられる。筥崎宮創建から平安時代中期にかけての遺構は筥崎宮南東部の南北 300m、東西 100m の範囲に集中し、出土遺物からは官衙もしくは官人居住域といった性格



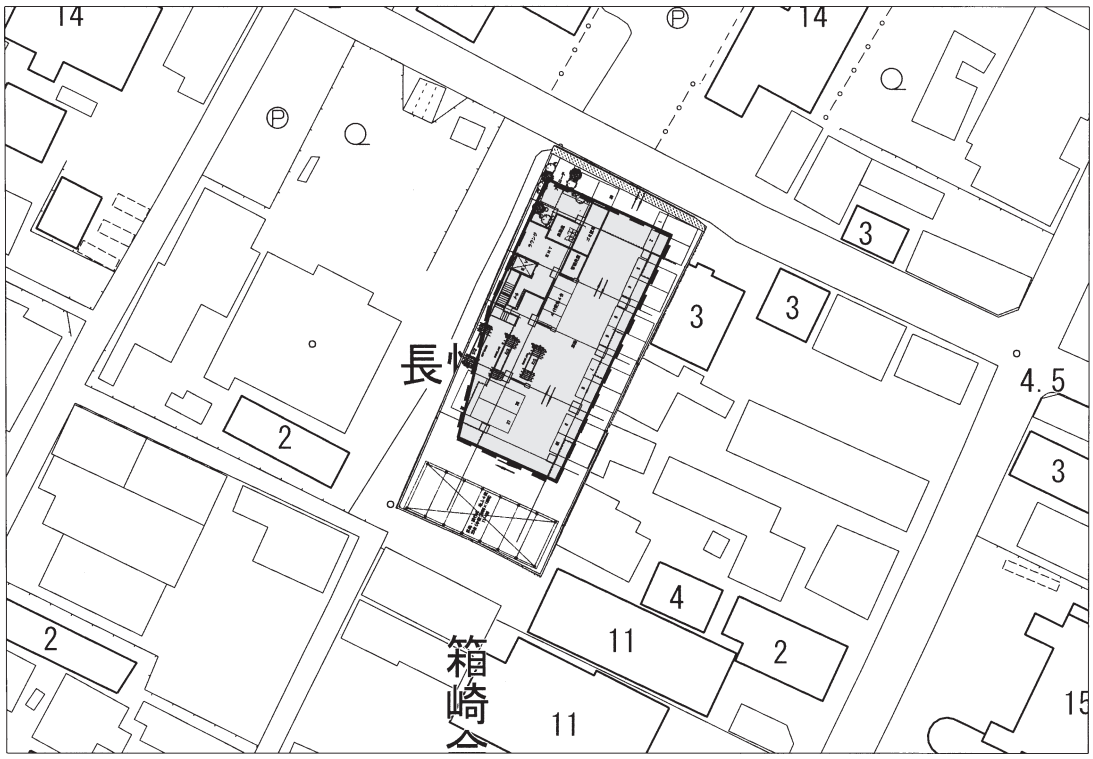
第 1 図　箱崎遺跡と周辺の遺跡（縮尺 1/25000）

を見て取れる。平安時代後期には、博多・箱崎に宋商人が居留し活発に日宋貿易が展開されるようになる。遺構は前段階より倍以上に拡がる。箱崎遺跡は筥崎宮を中心として、権門社寺と密接な関係をもち、対外交易の一大拠点博多を補完する立場にあったが、平安時代末から鎌倉時代にかけてダンケルク海進による海面上昇により博多遺跡群が位置する砂丘が狭隘になったことも一因として考えられよう。筥崎宮は対外交易を営んでいた宋人を神人、武装した下級神職として抱え、貿易の利権をめぐって大宰府や大山寺と対立し、保延 6 年（1140）に大山寺・香椎宮・筥崎宮等の僧徒・神人等、大宰府以下の屋舎数十家を焼く。仁平元年（1151）の大宰府官人による大追捕の結果、大宰府支配が強化される。そのような背景の下、12 世紀後半以降に中国陶磁器の出土量が増加する。大宰府の支配下、石清水八幡宮との人の動きが減ったためか、12 世紀前半によくみられた畿内産樟葉型瓦器は鎌倉後期までほとんどみられなくなる。治承・寿永の内乱（源平合戦 1180～1189）後、石清水八幡宮別宮となり、田中家による支配が戦国時代まで続く。鎌倉時代後半から南北朝時代にかけて出土が再び増加する楠葉型瓦器は、12 世紀前半の楠葉型瓦器と同様に人の動きを示す足跡と捉えられるが、当該期の楠葉型瓦器は小型の輪花椀・ミニチュアの鍔付三足羽釜と非日常的な器種となっている。文永 11 年（1274）・弘安 4 年（1281）の蒙古襲来に際して石築地の築造の記事があるが、後世に多大な破壊を受け、遺跡北端の旧九州大学構内数か所の調査地で基底部が確認された他、遺跡の海側に想定されている石築地は確認されていない。箱崎地区では、薩摩国御家人が石築地役、異国警固番役に割り当てられている。一方で、本調査地を含む砂丘の北西側南北 300m、東西 100m の範囲では 13 世紀後半の焼土層が確認され、二次被熱した陶磁器が多く出土している。文永の役における元軍の兵火による可能性がある。寺社造営料唐船「新安沈船」は、1323 年に慶元（寧波）から日本へ向け出帆、韓国新安沖で沈没し、膨大な遺物が引上げられた。

その中に筥崎宮勧進僧教仙の名が記された木簡が複数発見されている。箱崎遺跡では希少な南宋後半～元の龍泉窯青磁の優品が高頻度で出土している。箱崎出土の龍泉窯青磁の造りをみると、高台畳



第２図 箱崎遺跡発掘区域図（縮尺 1/8000）



第３図 箱崎遺跡第 96 次調査発掘地（縮尺 1/1000）

付が細く削り出されているものが多い。それらは新安沈船より前段階の 13 世紀後半のもので、寺社造営料唐船以前にも貿易船へ数次にわたる関わりにより、什器としての陶磁器を入手する際に有利な状況にあった。

◇参考文献　川添昭二 1970「筥崎の大夫 － 府官研究の一節」『福岡地方史談話会会報』第 100 号／広渡正利 1999『筥崎宮史』文献出版 ／川添昭二監修 重松敏彦編 2007『大宰府古代史年表』吉川弘文館／角川日本地名大辞典 40 福岡県

Ⅲ　調査の記録

1　調査の概要

調査区の長軸は周辺の地割と同じく真北から約 21°東に振れている。調査に先行して調査対象の遺構面までの表土は重機により鋤取り、土砂はダンプトラックで外部に搬出し、以降人力による掘下げで生じた残土は調査区内で処理することとした。調査区を長軸で二分、北東側をⅠ区（A-1･2 区）、南西側をⅡ区（B-1･2 区）とし、二分した調査区と残土置き場を工程の半ば程で残土置場として限界に達した時点で、重機で切り返して調査することとした。以下、調査日誌抄から 6 月 3～5 日 表土鋤取り 5 日 機材搬入、遺構確認　19～20 日 撹乱・井戸の掘下げ　20～25 日 A-1 区Ⅰ層、攪乱掘下げ　24･25 日 SE06･07 井戸掘下げ　7 月 1～5 日 A-1･2 区遺構（井戸・柱穴・溝）　掘下げ　8 日 A-1･2 区全景写真撮影　9～12 日 SE03･06･07･15～17 井戸掘下げ 12 日 SE03･06･07 井戸、SK11･12 井戸清掃・個別写真撮影 7～19 日 SE16･30 井戸掘下げ　23 日 SE03･06･07 井戸、A-1 区ピット・溝掘下げ　24 日 SE03･06 井戸枠、SE02 井戸掘下げ 25 日 A-2 区遺構（SE01･02 井戸、SK09 土坑、ピット状遺構）掘下げ 26 日 SE01、A-2 区ピット掘下げ 29･30 日 重機による打って返し A-2 区 SE01･32 井戸掘下げ 8 月 1～8 日　B-1 区遺構掘下げ 9～20 日 B-2 遺構掘下げ 22 日 SE02 井戸 ･04 土坑掘下げ　23 日 B-1･2 区全景写真撮影　26 日 B-2 区土坑（SK59）井戸（SE02･48）29 日 B-2 区遺構（SK55.K-08 他）掘下げ 20 日以降の多雨により 1 週間延長に 30 日～9 月 3 日 SE02･48･55 井戸、K-02 掘下げ　4 日 B-1 区遺構（K-08.SX34 他）掘下げ　5･6 日 B-1 区遺構（SE42 井戸他ピット）掘下げ、台風養生 9 日 B-1 区遺構（SE42･64 他ピット）掘下げ 10～18 日 B-1 区遺構掘下げ 20 日 借上機材返却、機材撤収。

2　遺構と遺物

検出遺構

掘立柱建物（第 5 図）

SB01　調査区南西で検出した梁間 2 間、桁行 3 間の東西棟である。梁間の全長 3.1m、桁行の全長 5.0m を測る。柱穴は円形で、径 25～35cm、深さ 25cm 前後を測る。北側の西から 1･2 個目の柱穴が SE01 に切られ、東側の北から 1･2 個目の柱穴が撹乱を受けている。方位は N-25°-E に取る。

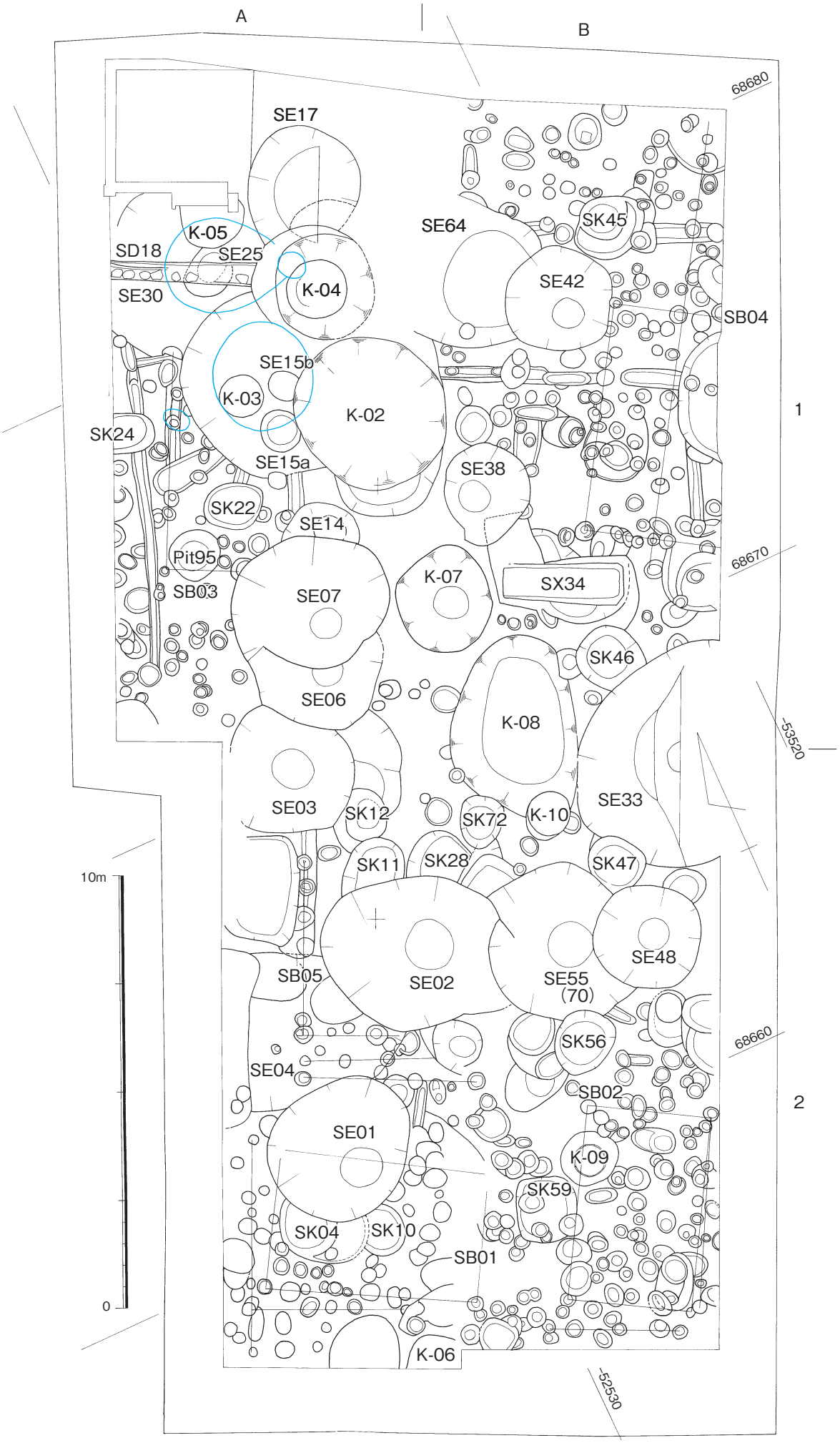
SB02　調査区南東で検出した梁間 2 間、桁行 3 間の南北棟である。梁間の全長 3.0m、桁行の全長 4.6m を測る。柱穴は円形で、径 25～35cm、深さ 10～35cm を測る。西側の北から 2 個目の柱穴が K-09 に切られる。方位は N-25°-E に取る。

SB03　調査区北西で検出した梁間 2 間、桁行 3 間の推定南北棟である。想定される東側と北側の柱穴が SE07･15、SK14 に切られ、桁行の全長 5.0m、南側の棟持柱から折り返した梁間の推定延長 3.8 mを測る。柱穴は円形で、径 30～40cm、深さ 30～40cm 前後を測る。方位は N-25°-E に取る。

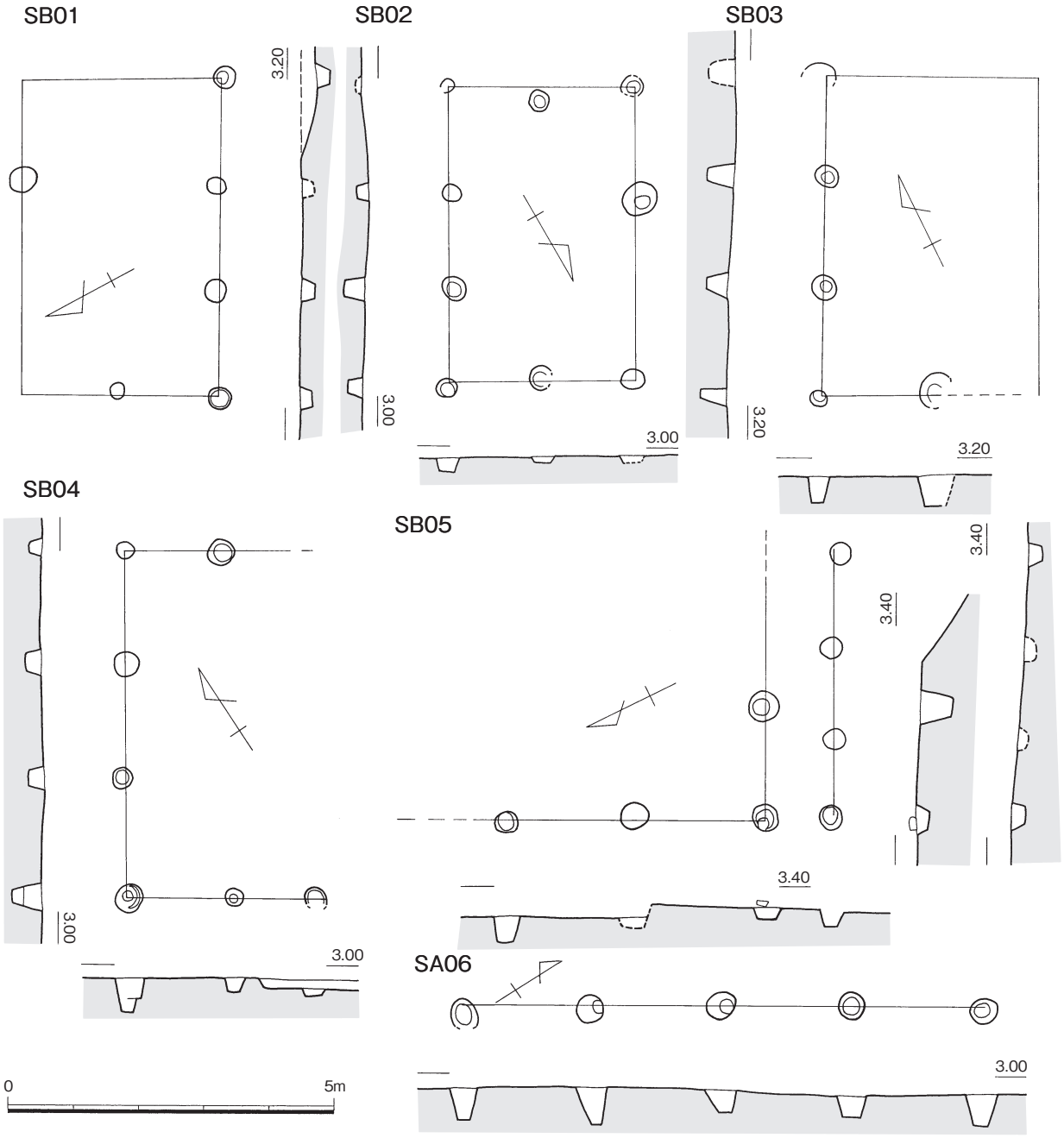
SB04　調査区北東で検出した梁間 2 間、桁行 3 間の推定南北棟である。東側の柱穴の内、南端 1 個を除く他の柱穴が調査区外に想定される。梁間の全長 3.0m、桁行の全長 5.3m を測る。柱穴は円形で、径 30～40cm、深さ 30～40cm 前後を測る。方位は N-25°-E に取る。

SB05　調査区南西で検出した建物の南西角の断片である。北側と東側が SE02･03 に切られ、建物の全体規模は不明である。柱穴は円形で、径 40～50cm、深さ 40～60cm を測る。建物の南西に 1.0m の距離を取って、一回り小さい径 30～40cm 柱穴が並び、庇とみられる。方位は N-25°-E に取る。

SA06　調査区北東端で検出した南北に延びる柱列 4 間分で、調査区外に建物として展開する可能性もある。柱穴は円形で、径 45cm 前後、深さ 35～50cm を測り、柱間の間隔は 2.0m の等間隔を取る。方位は N-30°-E に取る。



第 4 図　箱崎遺跡第 96 次調査遺構配置図（縮尺 1/125）



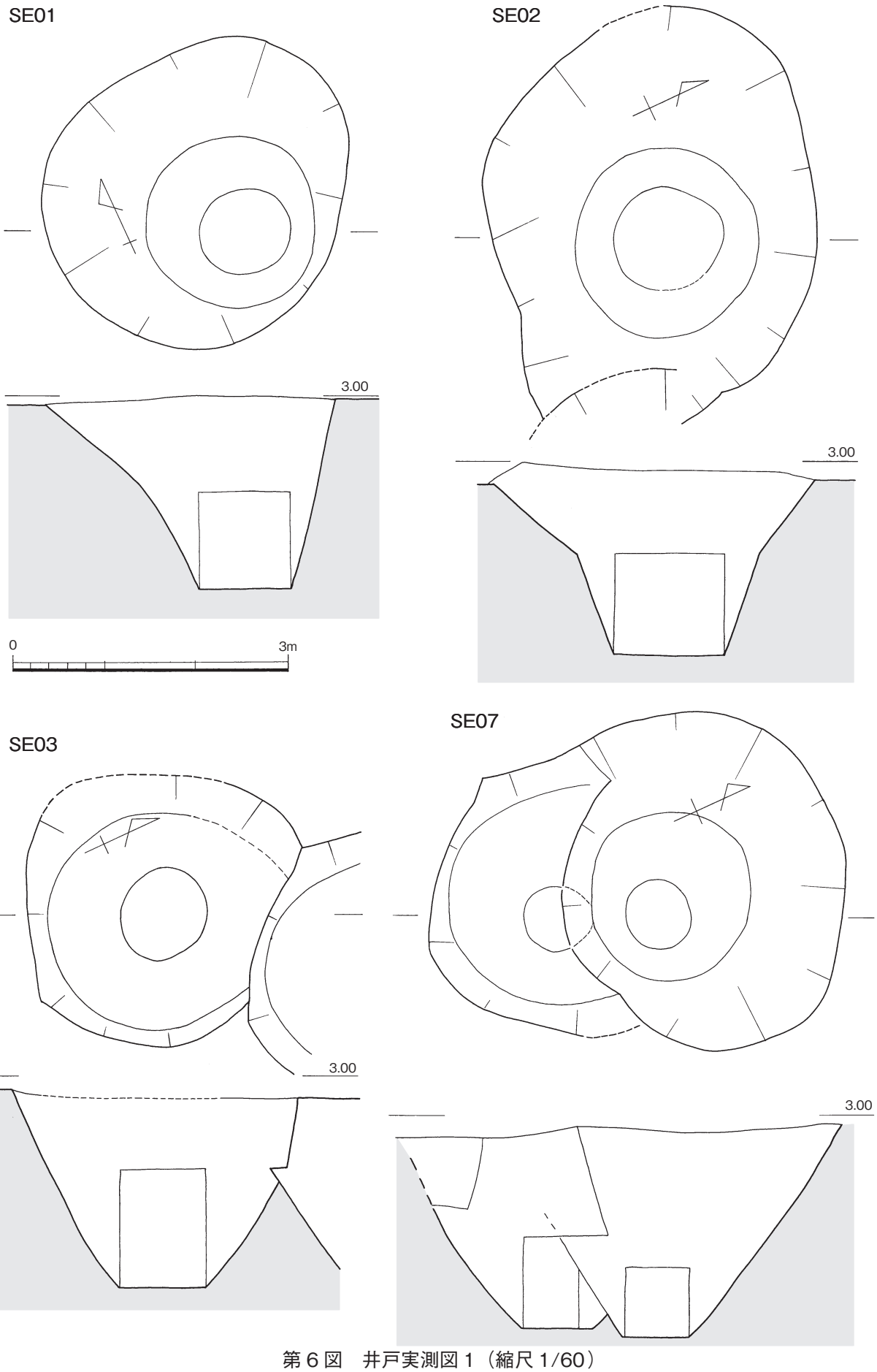
第５図　掘立柱建物実測図（縮尺 1/100）

井戸（第 6･7 図）

SE01　調査区南西で検出した。掘り方の平面形は径 3.2～3.5m の不整円形を呈し、深さ 2.1m を測る。基底部に径 1.0m、深さ 1.1m の桶側の痕跡がみられた。底面の標高 0.9m を測る。SK09･10 を切る。

SE02　調査区南西で検出した。掘り方の平面形は径 3.5～4.2m の不整円形を呈し、深さ 2.1m を測る。基底部に径 1.2m、深さ 1.1m の桶側の痕跡がみられた。底面の標高 0.9m を測る。SK08･11･28･71 を切る。

SE03　調査区中央西で検出した。掘り方の平面形は径 3.0～3.2m の不整円形を呈し、深さ 2.3m を測る。基底部に径 0.95m、深さ 1.3m の桶側の痕跡がみられた。底面の標高 0.7m を測る。SE06 に切られる。



第６図　井戸実測図１（縮尺 1/60）

SE06　調査区中央西で検出した。SE07 に切られ、南半分が残る。復元される掘り方の平面形は径 3.1m の 不整円形を呈し、深さ 2.2m を測る。基底部に径 0.75m、深さ 1.0m の桶側の痕跡がみられた。底面の標高 0.6m を測る。

SE07　調査区中央西で検出した。掘り方の平面形は径 3.2～3.7m の不整円形を呈し、深さ 2.2m を測る。基底部に径 0.7m､深さ 0.75m の桶側の痕跡がみられた。底面の標高 0.6m を測る。SE06 を切る。

SE15　調査区北西で検出した。東側が撹乱を受け、残存する掘り方の復元径 4.4m を測る。1.6m 掘下げたところで、2 基切り合っていることが判明した。南側の桶側 a の痕跡が径 0.7m､深さ 0.5m、底面の標高 0.7m、北側の桶側 b の痕跡は径 0.7m、深さ 0.45 m、底面の標高 0.75 m を測る。

SE31　調査区北西、上面遺構 SD18 下面で確認した。掘り方の平面形は径 2.2m の円形を呈し、深さ 0.3m を測る。基底部に径 0.7m､深さ 0.3m の桶側の痕跡がみられた。底面の標高 0.7m を測る。

SE38　調査区中央北で検出した。掘り方の平面形は 2.1m 前後の不整円形を呈し、深さ 1.8m を測る。基底部に径 0.7m、深さ 0.25m の桶側の痕跡がみられた。底面の標高 0.9m を測る。

SE42　調査区北東で検出した。掘り方の平面形は径 2.5～2.6m の不整円形を呈し、深さ 1.8m を測る。基底部の南側に径 0.7m、深さ 0.1m の桶側の痕跡がみられた。底面の標高 1.0 m を測る。

SE48　調査区南東で検出した。掘り方の平面形は径2.4～2.5m の不整円形を呈し､深さ1.9m を測る。基底部に径 0.75m、深さ 0.4m の桶側痕がみられた。底面の標高 0.9m を測る。SE55･SK62 を切る。

SE55　調査区南東で検出した。掘り方の平面形は径 3.5～3.7m の不整円形を呈し、深さ 1.7m を測る。基底部中央に径 1.0m、深さ 0.4m の桶側の痕跡がみられた。底面の標高 0.9m を測る。

土坑（第 8～10 図）

SK09　調査区南西で検出した。北東が SE01 に切られ、全貌は不明である。残存長 2.1m、残存幅 1.0m、深さ 0.6m を測る。

SK10　調査区南西で検出した。北西が SE01 に切られ､径 1.2m の円形を呈し､深さ 0.2m を測る。土師器小皿・杯が底面から 0.1m 浮いた状態で出土した。

SK11　調査区中央南で検出した。南東が SE02 に切られ､北側は SK12 を切る。不整楕円形を呈し、残存長 1.5m､幅 1.4m､深さ 0.55m を測る。土師器小皿・杯が底面から 0.4m 浮いた状態で出土した。

SK12　調査区中央南で検出した。北西が SE03、南側が SK11 に切られ、全貌は不明である。残存長 1.3m、幅 1.2m、深さ 0.5m を測る。青磁小碗・土師器小皿が底面から 0.5m 浮いた状態で出土した。

SK14　調査区北西で検出した。南西が SE07 に切られ、SD13 を切る。残存長 1.8m、残存幅 0.8m の不整円形を呈し、深さ 0.65m を測る。土師器小皿・杯が底面から 0.6m 浮いた状態で出土した。

SK22　調査区北西で検出した。北東が調査区外にかかる。全長 1.4m、検出幅 1.1m、深さ 0.25m の不整方形を呈する。 SD20 を切る。

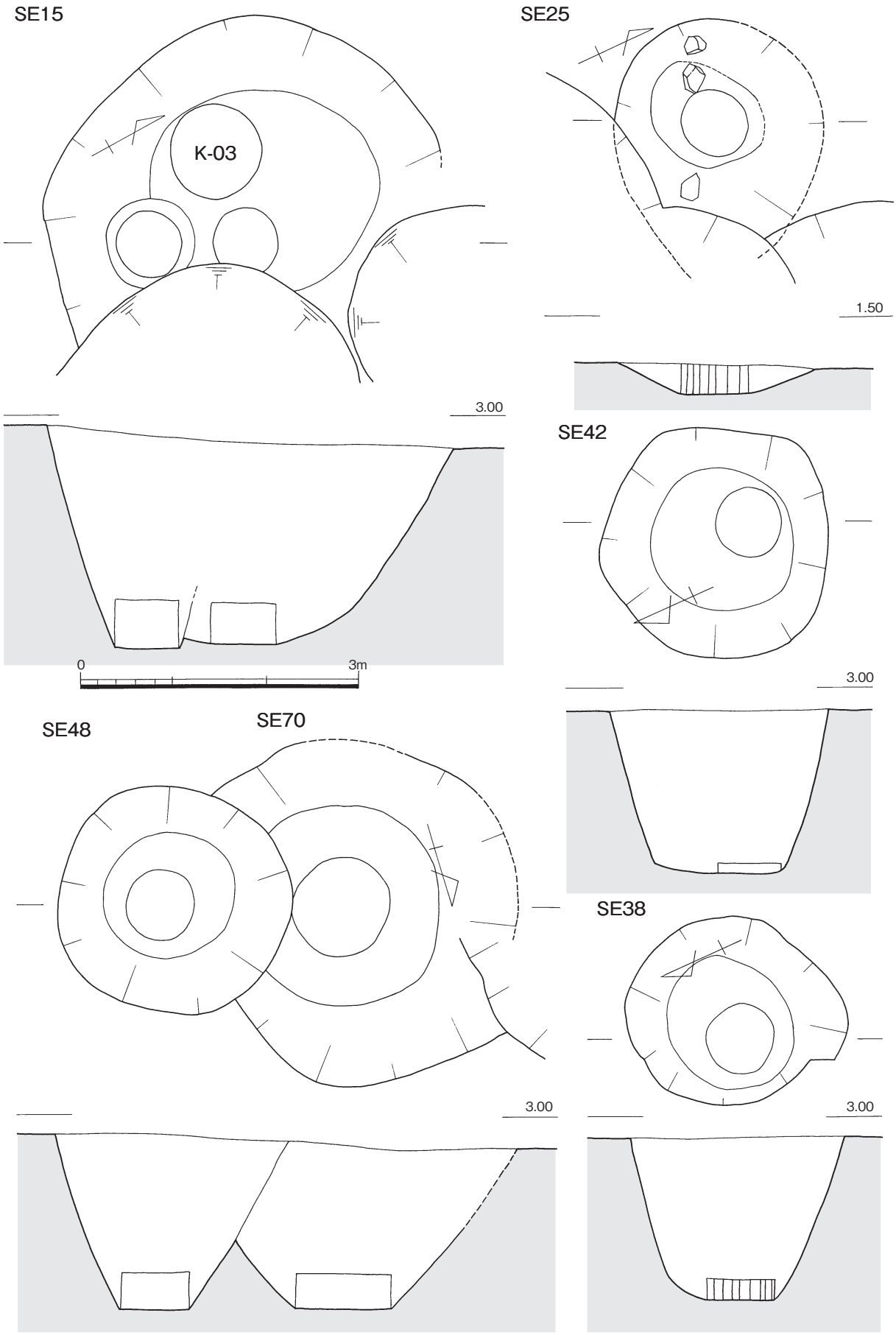
SK24　調査区北西端で検出した。SD20 を切る。検出長 1.0m、幅 0.95m、深さ 0.3m を測る。

SK28　調査区中央南で検出した。南側が SE02 に切られ、全貌は不明である。残存長 1.1m、残存幅 1.4m、深さ 0.2m を測る。土師器小皿が底面から 0.1m 浮いた状態で出土した。

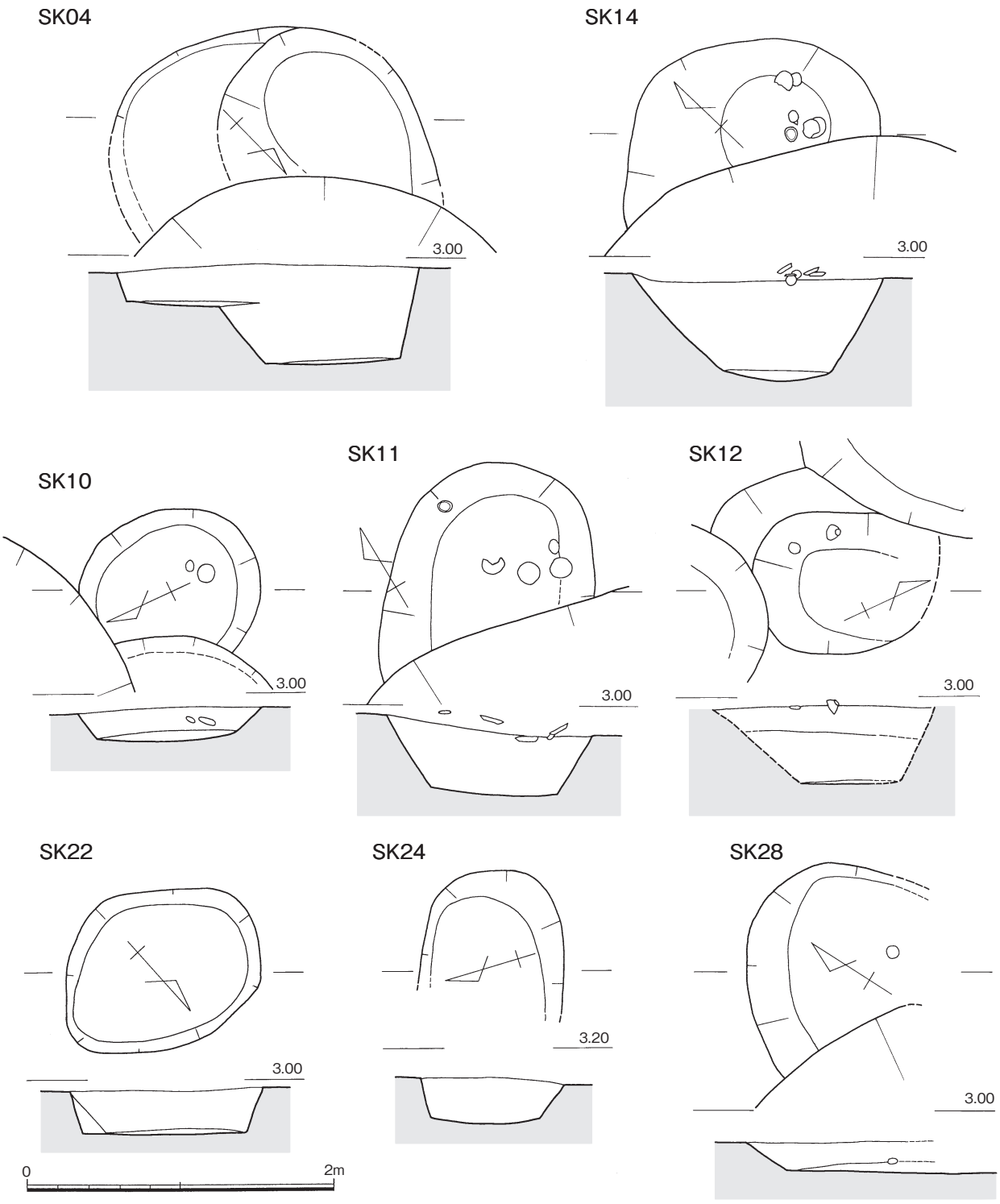
SK45　調査区北東で検出した。1.6 × 1.4m の不整隅丸方形を呈し、深さ 0.3m を測る。底面の北側に、径 1.0m、深さ 0.2m の掘り込みがみられた。

SK46　調査区中央西で検出した。SE33 に切られる。径 1.4m の不整円形を呈し､深さ 0.5m を測る。

SK47　調査区中央西で検出した。北東が SE33､南西が SE55 に切られる。全長 1.35m､残存幅 1.15m の不整円形を呈し、深さ 0.85m を測る。主軸の方位は N- 30°-W に取る。土師器小皿・杯が底面から 0.8m 浮いた状態で出土した。



第７図　井戸実測図２（縮尺 1/60）

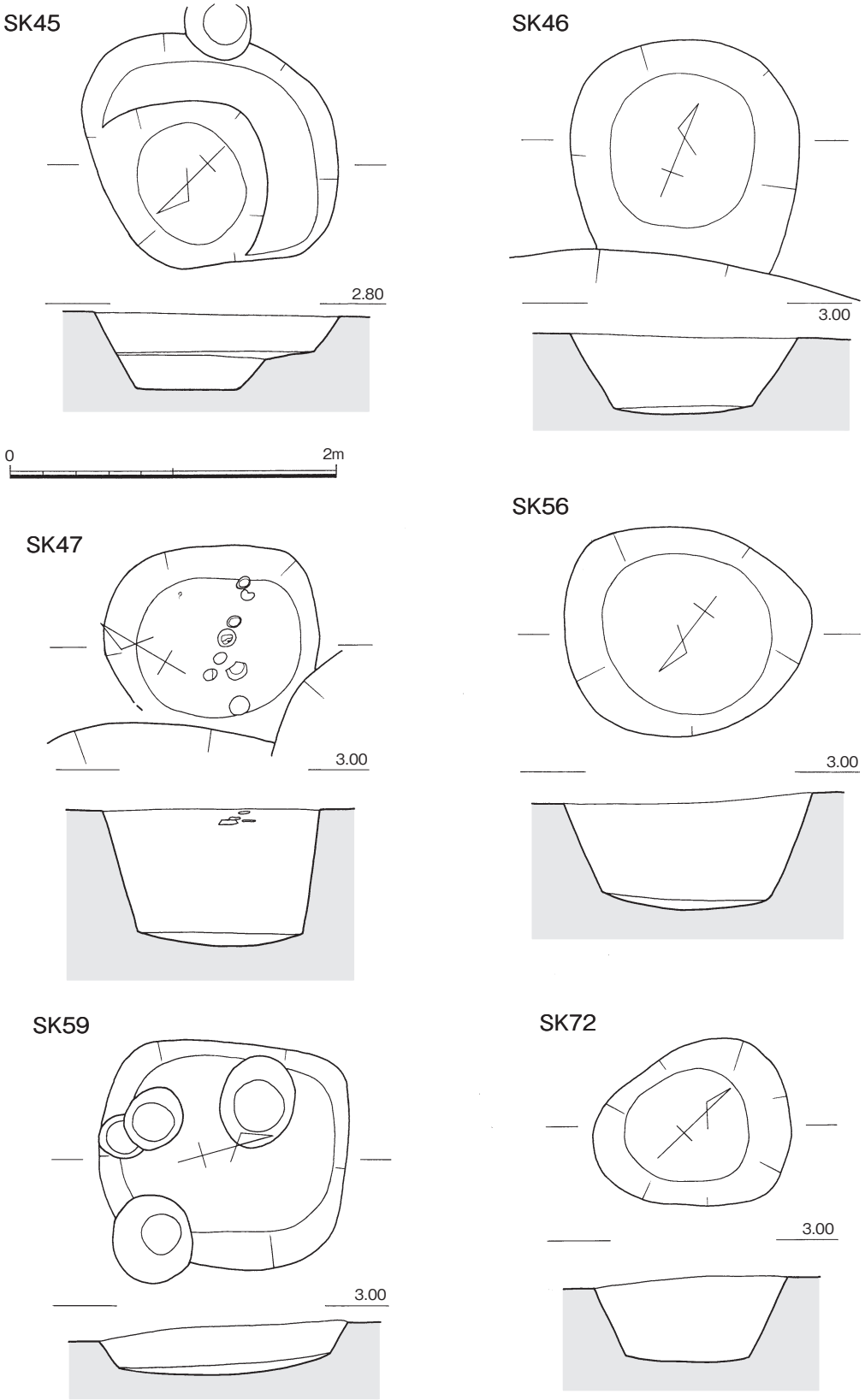


第８図　土坑実測図１（縮尺 1/40）

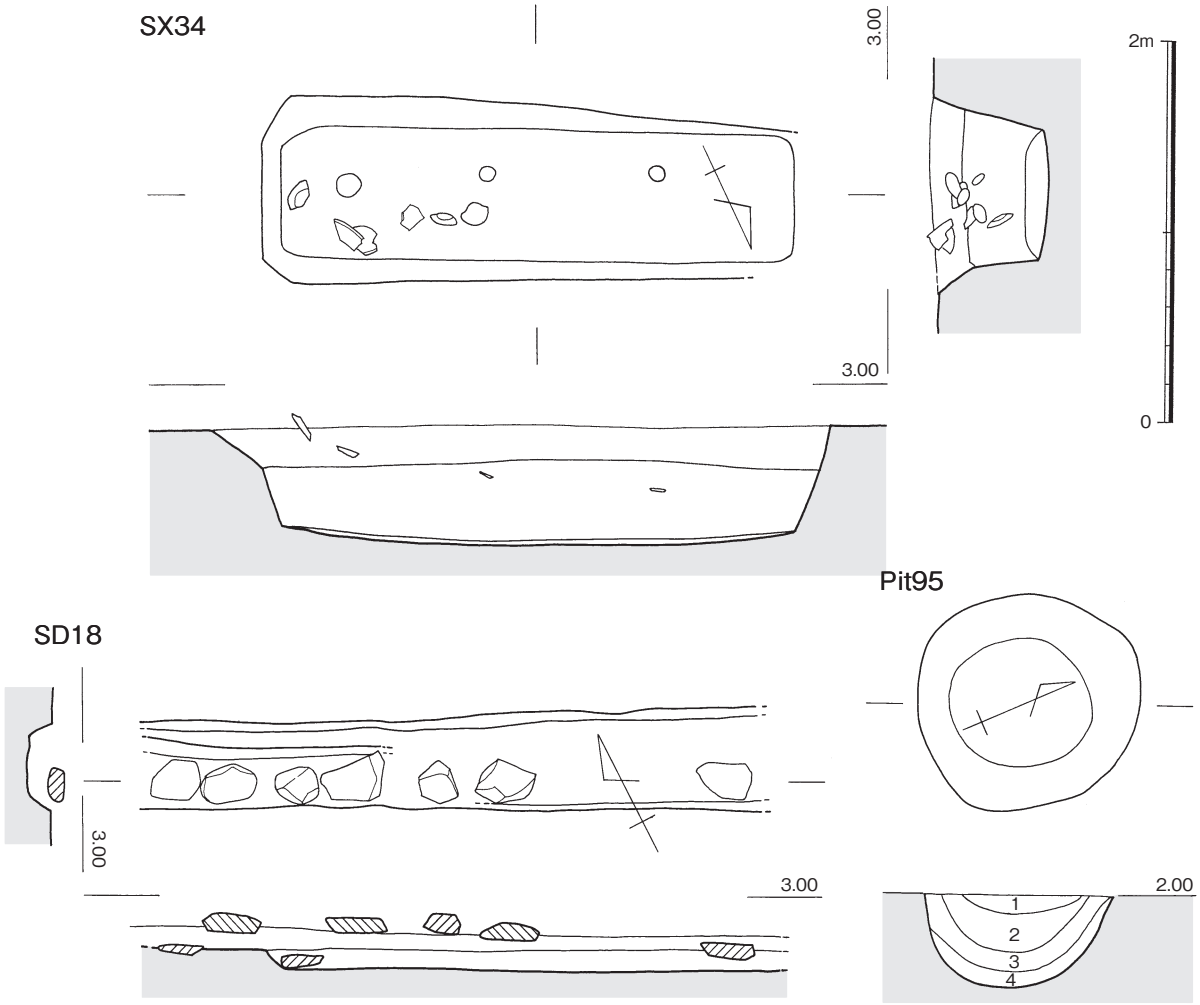
SK56　調査区南東で検出した。SE55 を切る。径 1.35～1.5m の不整円形を呈し、深さ 0.65m を測る。

SK59　調査区南東で検出した。北東が調査区外にかかる。全長 1.55m、幅 1.1m、深さ 0.35m の隅丸方形を呈する。 方位は N- 25°-E に取る。

SK72　調査区中央南で検出した。全長 1.2m、検出幅 1.0m、深さ 0.5m の不整楕円形を呈する。



第９図　土坑実測図２（縮尺 1/40）



第 10 図　土坑実測図 3（縮尺 1/40）

土壙墓（第 10 図）

SX34　調査区中央北東で検出した。木質の痕跡や鉄釘が確認されなかったが、組み合わせ式の木棺を埋置した可能性もある。南西が SK73 に切られ、北側が撹乱を受けているが、掘り方は全長 2.9m、幅 1.0m の方形を呈し、深さは 0.6m を測る。主軸の方位は N- 25°- E に取る。土師器小皿・杯・鍋が底面から 0.2～0.5m 浮いた状態で出土した。

溝（第 10 図）

SD18　調査区北西で検出した。幅 0.45～0.55m、深さ 0.25m の東西溝で、SE38 上面で検出した。北東は SE15/17･K-04/05 に切られ、北西は調査区外に延び、延長 3.4m 検出した。方位は N-25 °-E に取る。遺構検出面付近で径 0.2～0.35m、厚さ 0.05～0.1m の板石を並置した状態で検出された。一部溝の底面付近で検出された板石もある。これらは溝の木蓋上に風で飛ばないように置かれたもので、底面近くで検出された板石は溝が埋没する前に木蓋が腐朽し溝に崩落したものと考えられる。

SD20　調査区北西で検出の幅 0.25～0.35m、深さ 0.3m の南北溝、SK24 に切られ、両端は調査区外に延び、延長9m 検出した。北側はやや西に蛇行する。直線に延びる南側の方位は N- 25°-E に取る。

ピット状遺構（第 10 図）

Pit95　調査区中央西で検出した。径1.1～1.2m の円形を呈し、深さ 0.6m を測る。4 層に分層され、1. 黒褐色（2.5Y3/1）砂質土、2. 黄灰色（2.5Y6/1）砂質土、3. 暗灰黄色（2.5Y5/2）砂質土、4. 黄灰色（2.5Y6/1）砂質土で、4 層は炭化物を含む。

出土遺物

SE01 出土遺物（第 11 図）

土師器 底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。小皿（1～4）1～3 は口径 8.0～8.9cm・器高 1.1～1.4cm を測り、4 は法量が他の一群と比べ大きく、口径 9.8cm・器高 1.6cm を測る。杯（5）口径 12.2cm・器高 2.8cm を測る。**瓦器** 小皿（6）底部は糸切り離し、体部外面から内底にかけてヘラ磨き、外底に板状圧痕が残る。**瓦質土器** こね鉢（7）体部下半以下が残存する。外面はハケ目の上に指頭圧痕、内面はハケ目が残り、内底は使用により磨滅、外底には板状圧痕が残る。井戸枠内からの出土である。

SE02 出土遺物（第 11 図）

土師器 小皿（8～12）底部は糸切り離し、8･12 の体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。9～11 は体部外面から内底まで横ナデ。口径7.8～8.6cm・器高1.3～1.6cm を測る。杯（13）口径 12.2cm・器高 2.8cm を測る。底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。**瓦質土器** こね鉢（14）端部が上方に突出する口縁部片で、内外面とも器表の荒れが著しく、外面の一部にハケ目が残る。**須恵器** こね鉢（15）端部が上方に突出し「く」字状をなす口縁部片で、胎土には粗い砂粒を多量に含み、明紫灰色を呈する。**青磁** 香炉（16）口縁部は内側に向け水平に屈曲する。外面に八卦文を削り出す。灰白色の胎土に、オリーブ灰色の釉が厚く掛かる。**陶器** 小壺（17）砂粒を多量に含み、にぶい橙色の胎土に、灰オリーブ色釉が掛かる。

SE03 出土遺物（第 11 図）

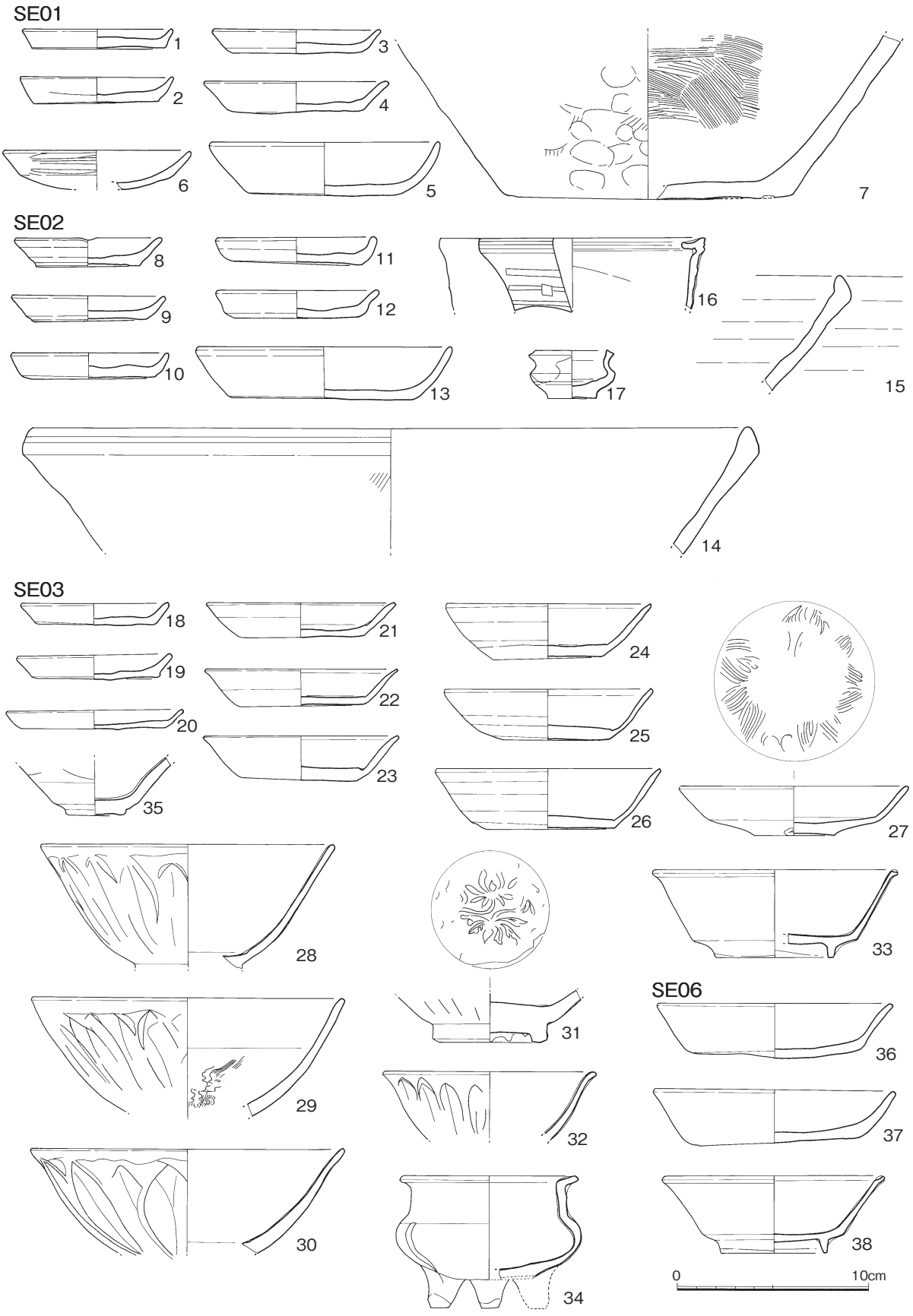
土師器 小皿（18～20）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 7.8～9.4cm・器高 1.0～1.4cm を測る。**白磁** 皿（21～27）21～26 は口禿の皿で、21～23 は全面施釉の後、口縁端部の釉をかき取るⅨ -1･a で、口径 10.0～10.4cm・器高 1.9～2.4cm を測る。24･25 は体部外面下位から底部にかけて露胎のⅨ -2 で、口径 10.8･11.0cm・器高 2.9･2.8cm を測る。26 は口径 11.9cm・器高 3.3cm を測るⅨ -1･a である。27 はⅧ -2 で、体部中位で屈曲し、直線的に延びる。内底見込みは平坦で、蓮華、葉文を印花で施す。**青磁** 龍泉窯系である。碗（28～31）体部外面に鎬蓮弁を削り出す。28～30 は底部が欠失している。29 の内面には櫛状工具により雲状の文様が施される。31 は底部片で、内底見込みに印花で蓮華折枝文を施す。小碗（32）体部外面に鎬蓮弁を削り出す。底部を欠失する。杯（33）内外面とも無文のⅢ -1 で、体部は下位で屈曲し、直線的に延びる。口縁部は鋭く短く引き出し、端部を摘まみ上げる。高台は細く削り出され、畳付けは幅が狭く露胎となす。香炉（34）三足の脚が付く鬲形の香炉である。扁平な胴部から頸部が直立して延び、口縁部は水平に屈曲する。鋭く稜をなす肩から脚にかけて垂直に凸線が入る。脚の先端は釉を剥ぎ取っている。胎土は灰白色を呈し、オリーブ灰色の釉が厚く掛かる。**黒釉陶器** 碗（35）口縁部を欠失する。内底見込みが平坦で、高台の削り出しは浅い。

SE06 出土遺物（第 11 図）

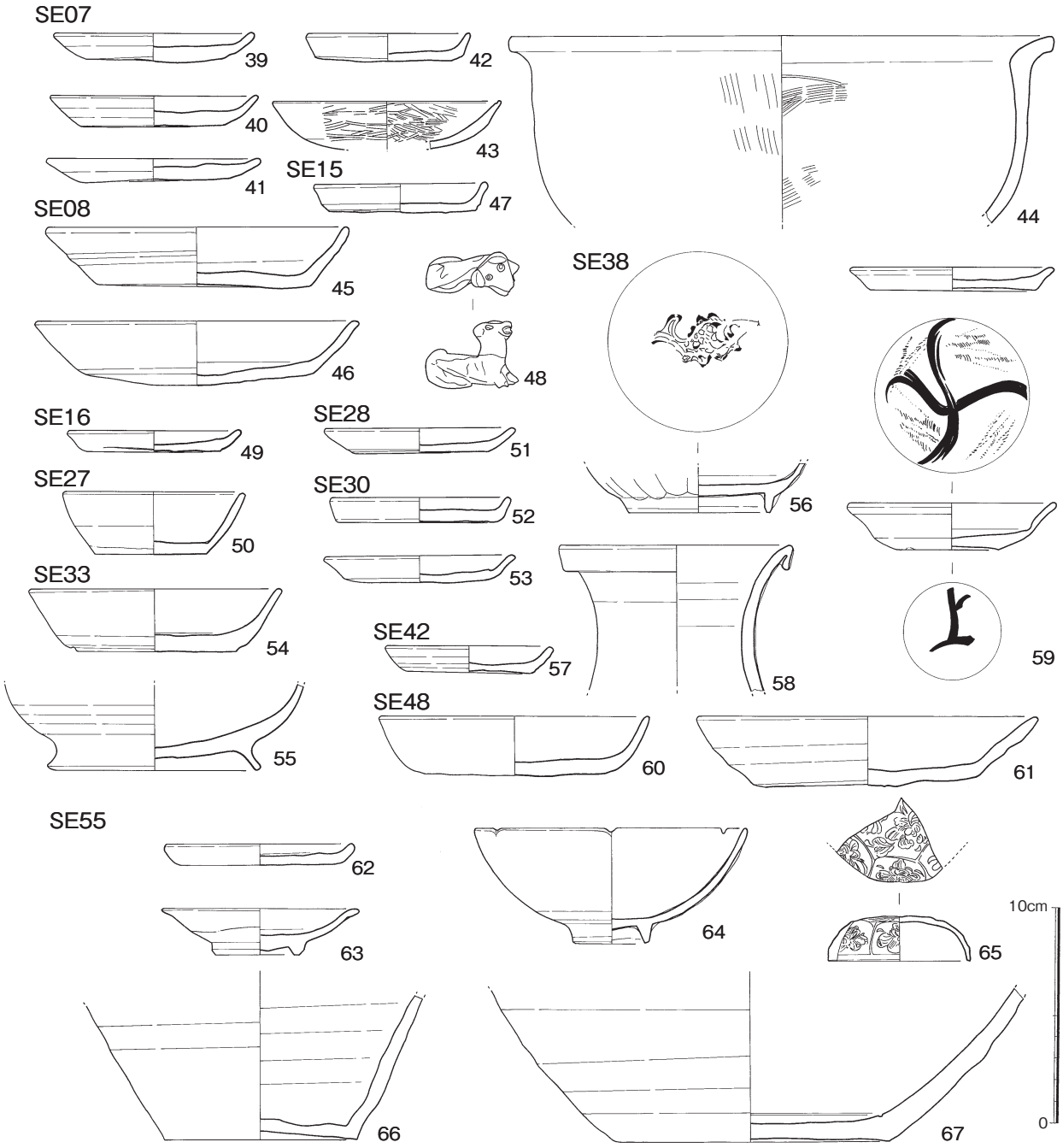
土師器 杯（36･37）底部は糸切り離し、36 は体部外面から内底まで横ナデ。口径12.4cm・器高2.9cm、37 の体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 12.8cm・器高 2.8cm を測る。**青磁** 杯（38）内外面とも無文の龍泉窯系腰折杯Ⅲ -1a で、底部と体部の境で屈曲し、明瞭に稜がつく。体部は直線的に外上方へのび、口縁端部は外に摘まみ出され、上面は平坦となす。底部の内側に高台を削り出す。

SE07 出土遺物（第 12 図）

土師器 小皿（39～42）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。39～41 は口径 9.5～10.1cm・器高 1.1～1.4cm を測る。42 は法量が他の一群と比べ小さく、口



第 11 図　井戸出土遺物実測図 1（縮尺 1/3）

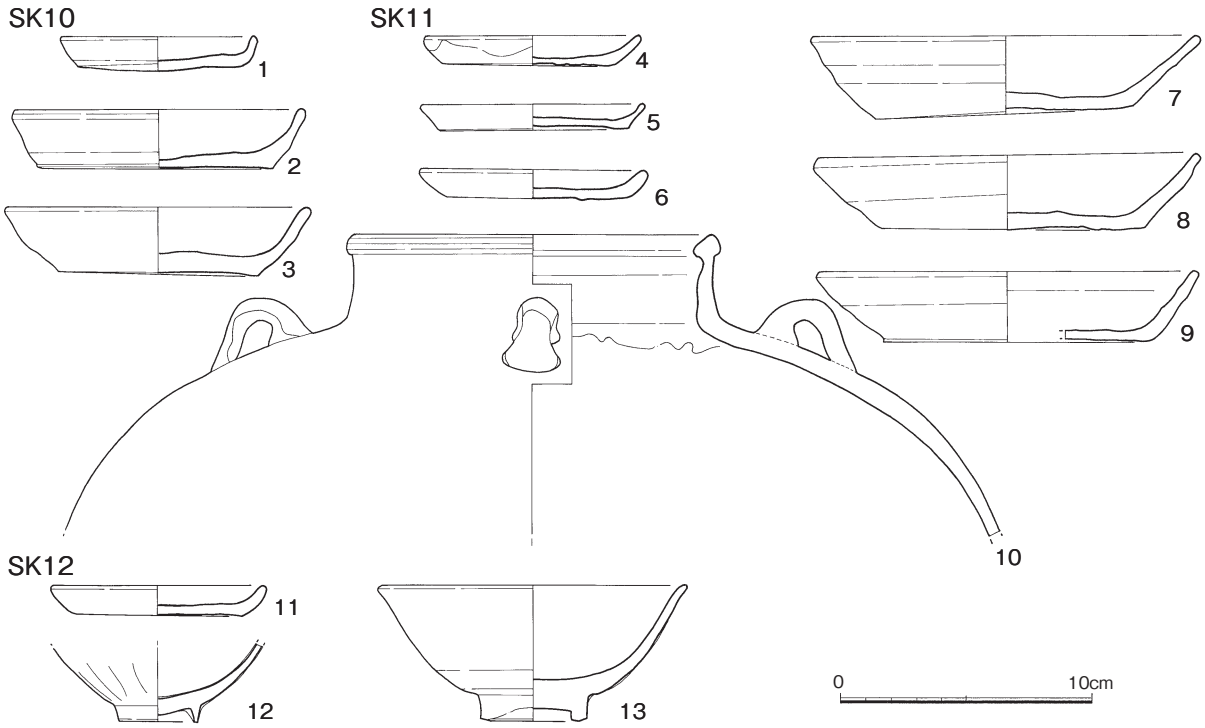


第 12 図　井戸出土遺物実測図 2（縮尺 1/3）

径 7.7cm・器高 1.3cm を測る。井戸枠内出土で、後出するものである。**瓦器** 小皿（43）底部は糸切り離し、体部外面から内底にかけてヘラ磨き、外底に板状圧痕が残る。**土師質土器** 鍋（44）口縁部は「く」の字に外反し、体部上半は直立、下半は内湾気味に丸みを持つ。底部を欠失する。口縁部は横ナデ、体部外面は粗いハケ目、内面上半は横ハケ目、下半はヘラナデを施す。

SE08 出土遺物（第 12 図）

土師器 杯（45･46）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 14.3･16.2cm・器高 2.8･3.0cm を測る。



第 13 図　土坑出土遺物実測図 1（縮尺 1/3）

SE15 出土遺物（第 12 図）

土師器 小皿（47）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 8.2cm・器高 1.4cm を測る。**陶器** 犬（48）伏せの姿勢を取る。胎土は灰白を呈し、頭部から背中にかけてオリーブ黄色の釉が掛かる。

SE16 出土遺物（第 12 図）

土師器 小皿（49）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 8.2cm・器高 1.0cm を測る。

SE27 出土遺物（第 12 図）

白磁 皿（50）体部外面下位より下が露胎のⅨ -2 で、口径 8.6cm・器高 3.1cm を測る。

SE28 出土遺物（第 12 図）

土師器 小皿（51）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 9.0cm・器高 1.1cm を測る。

SE30 出土遺物（第 12 図）

土師器 小皿（52･53）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 8.5･9.0cm・器高 1.1･1.2cm を測る。

SE33 出土遺物（第 12 図）

土師器 杯（54）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 11.9cm・器高 3.0cm を測る。**内黒土器** 椀（55）口縁部は欠失している。

SE38 出土遺物（第 12 図）

青磁 杯（56）体部外面には蓮弁を削り出す龍泉窯系Ⅲ -4 で、口縁部から体部上半かけて欠失する。体部は内湾気味に延び、内底見込みに印花による魚文を施す。

SE42 出土遺物（第 12 図）

土師器 小皿（57）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 9.6cm・器高 1.1cm を測る。 **白磁** 水注（58）鋭く屈折する口縁部から頸部にかけての破片資料である。**青磁** 皿（59）同安窯系Ⅰ -1 で、内底にヘラによる簡略化した花文と櫛状工具による「之」字形点綴文を入れる。露胎の外底には墨書「上」が記される。

SE48 出土遺物（第 12 図）

土師器 杯（60･61）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 12.7･16.0cm・器高 2.8･3.2cm を測る。

SE55 出土遺物（第 12 図）

土師器 小皿（62）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 9.0cm・器高 1.0cm を測る。**白磁** 皿（63）見込みの釉を輪剥ぎする高台付皿Ⅲ類である。**青磁** 小碗（64）龍泉窯系の体部内外面とも無文の碗Ⅲ -1 と相似形の小ぶりな碗で、体部から口縁部までゆるやかに内湾し立ち上がる。口縁部に輪花を刻む。胎土が灰白色を呈し、灰オリーブ色の釉が高台先端を除き全面にかけられる。**青白磁** 合子蓋（65）外面に型作りによる花文を施し、内面は天井部を除き端部まで露胎である。**陶器** 壷（66）残存する体部下半以下の範囲は無釉で、胎土には粗い砂粒を多量に含み、明緑灰色を呈する。**陶器** こね鉢（67）無釉焼き締めのこね鉢Ⅰ類で、口縁部は欠失している。内面は使用による磨滅、体部外面は横ナデを施す。胎土には粗い砂粒を多量に含み、橙色を呈する。

SK10 出土遺物（第 13 図）

土師器 底部は糸切り離しによる。小皿（1）体部外面から内底まで横ナデ。口径 7.9cm・器高 1.4cm を測る。杯（2･3）2 は体部外面から内底まで横ナデ、口径 11.8cm・器高 2.4cm を測る。3 は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 12.3cm・器高 2.9cm を測る。

SK11 出土遺物（第 13 図）

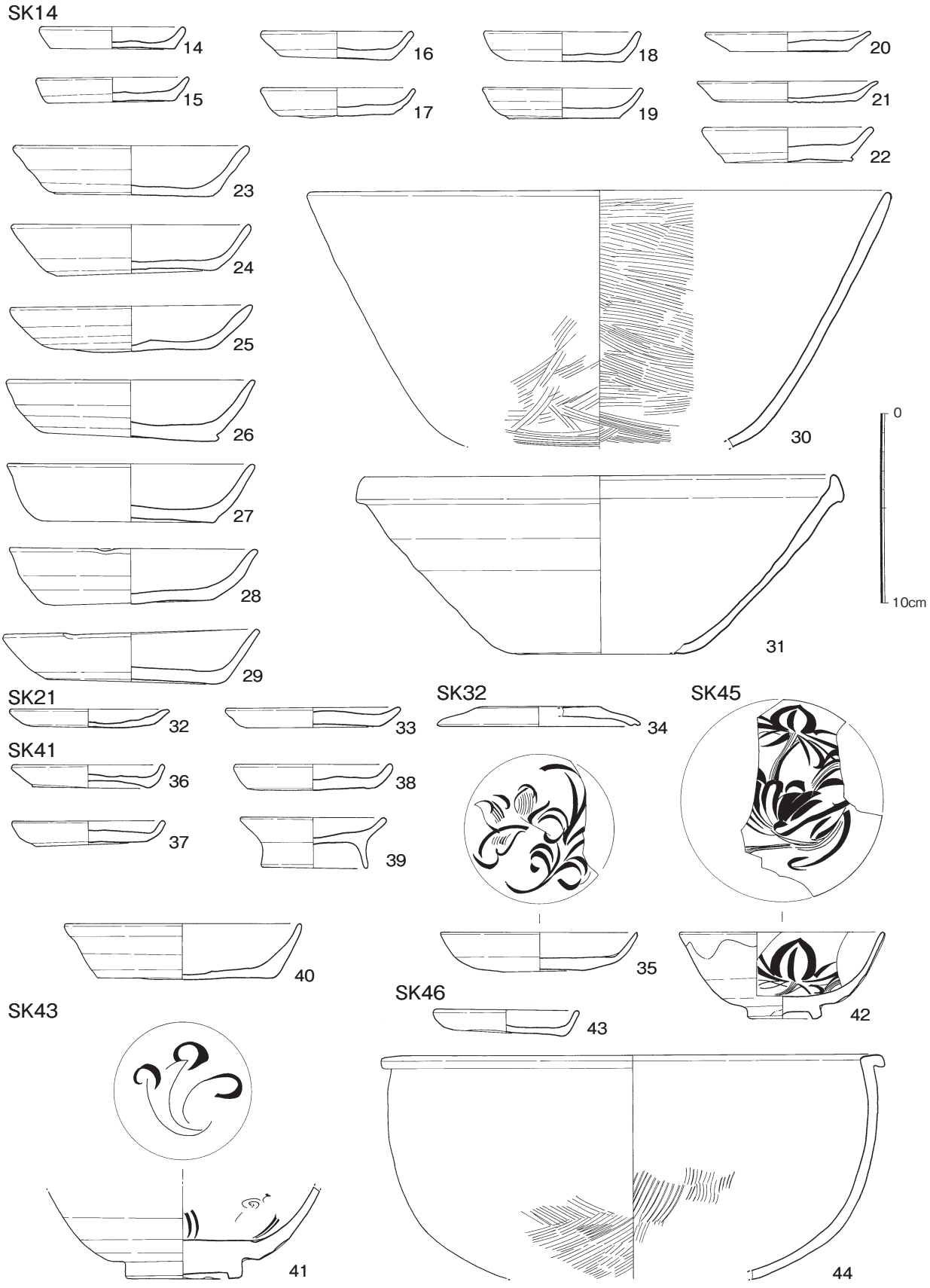
土師器 底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。小皿（4～6）口径 8.7～9.2cm・器高 1.1～1.2cm を測る。杯（7～9）口径 15.3～15.7cm・器高 2.8～3.2cm を測る。**陶器** 四耳壷（10）頸部が直立して延び、口縁部は肥厚し断面四角形を呈し、端部は内傾する。肩部に縦長の四耳を貼り付ける。体部中位以下は欠失している。細かい砂粒を多量に含む橙色の胎土に、にぶい黄褐色の釉が体部外面から頸部内面まで掛けられている。

SK12 出土遺物（第 13 図）

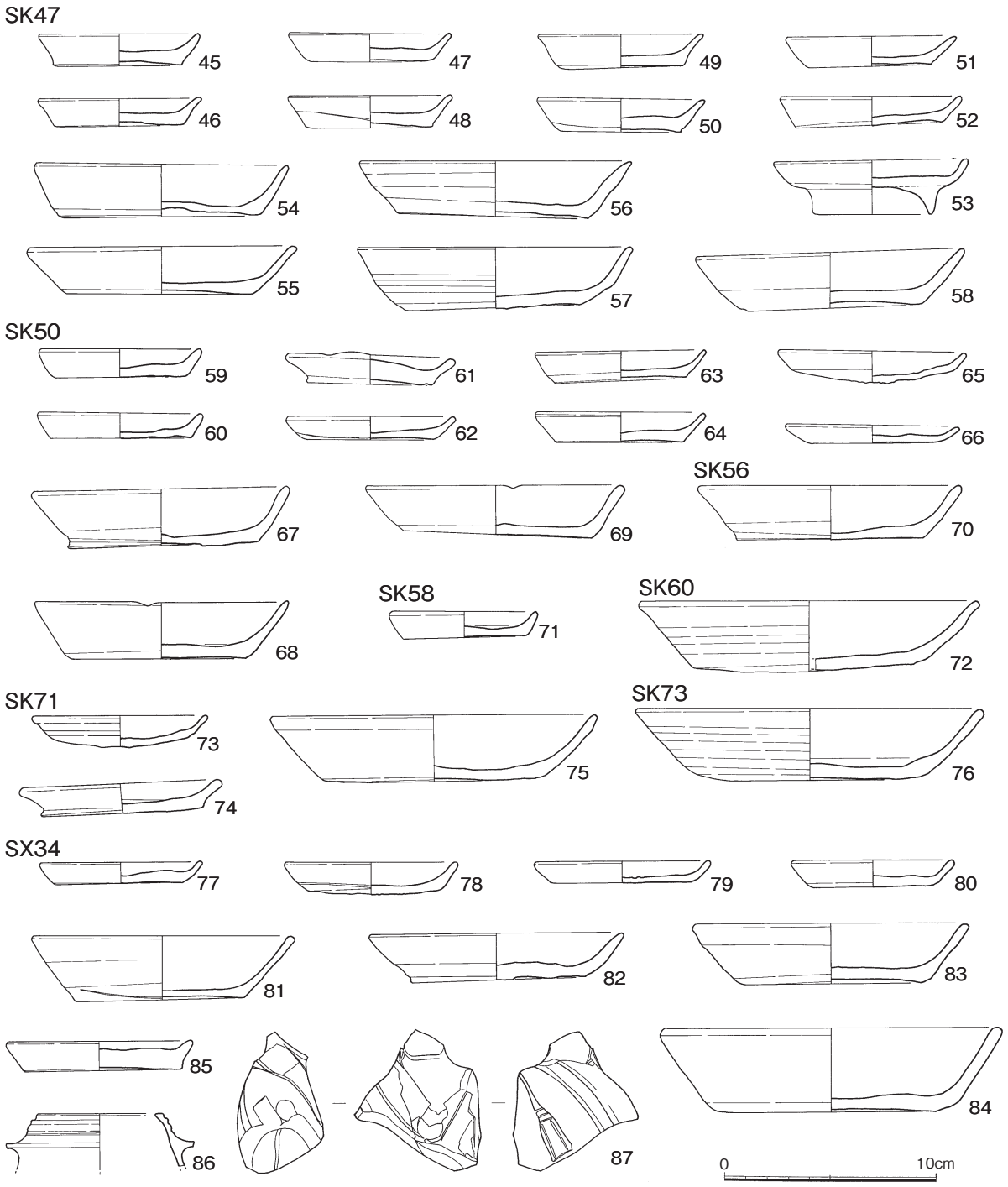
土師器 小皿（11）底部は糸切り離し、体部外面から内底まで横ナデ。口径 8.7cm・器高 1.2cm を測る。**青磁** 碗（12･13）いずれも龍泉窯系で、12 はⅢ -2 類で、口縁部が欠失している。厚く施釉され、断面三角形（細めの台形）の高台先端の釉をカキ取り露胎とし、鎬蓮弁文や高台の削りが鋭い。13 は無文の碗で、腰が張らず、蓮弁文碗と同じ外形である。

SK14 出土遺物（第 14 図）

土師器 底部は糸切り離しによる。小皿（14～22）14･16～19 は体部外面から内底まで横ナデ、口径 7.8～8.6cm・器高 1.2～1.6cm を測る。15･20～22 は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。15 は口径8.2cm・器高1.3cm を測る。20･21 は遺構上面からの出土で、15 は口径8.9･9.7cm・器高 1.1cm を測り、他の一群より口径が大きく、器高が低い。22 は口径 9.2cm・器高 1.9cm と、器高が高く、厚底である。杯（23～29）口径 12.6～13.7cm・器高 2.4～3.1cm を測る。23･24･25･27･28 は体部外面から内底まで横ナデ、26･29 は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。



第 14 図　土坑出土遺物実測図 2（縮尺 1/3）

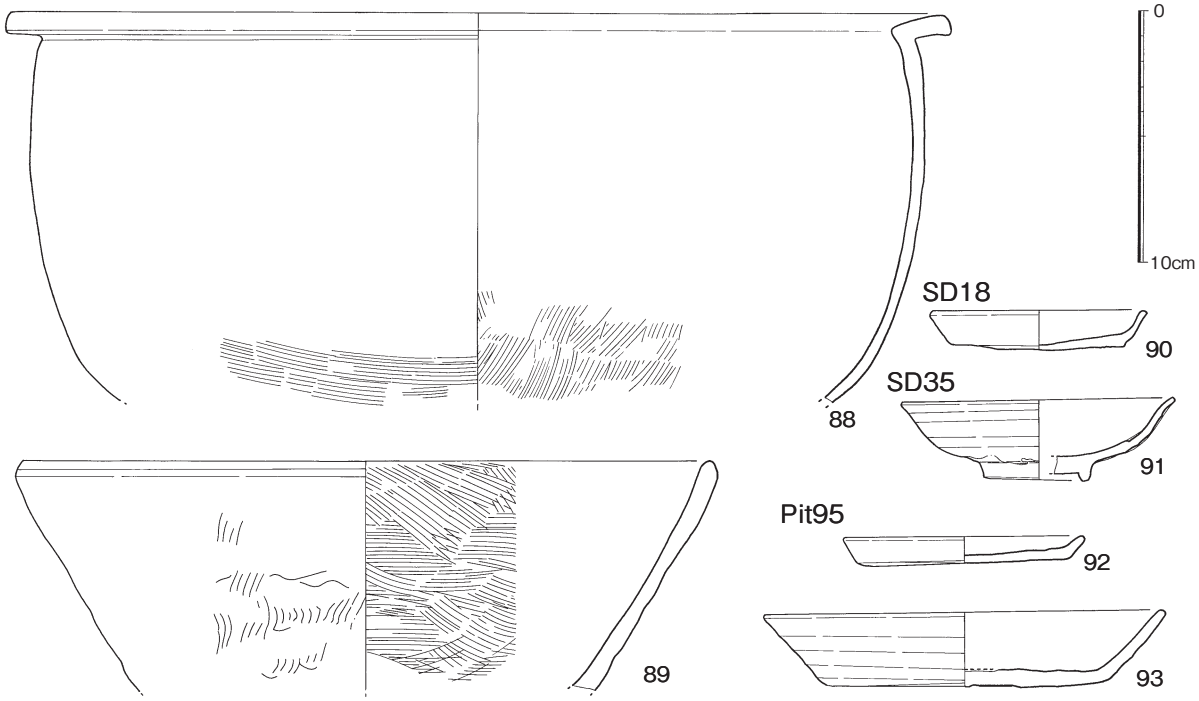


第 15 図　土坑出土遺物実測図 3・土壙墓出土遺物実測図 1（縮尺 1/3）

土師質土器 鍋（30）体部が口縁部まで直線的に延び、底部との境は不明瞭である。底部のほとんどは欠失している。外面は口縁部から体部上半にかけて横ナデ、体部下半は粗いハケ目、内面は横ハケ目を施す。**須恵器** こね鉢（31）体部は直線的に延び、口縁部は端部が上下に突出しＴ字状をなす。胎土には粗い砂粒を多量に含み、明褐灰色を呈する。

SK21 出土遺物（第 14 図）

土師器 小皿（32･33）底部糸切り、32 は体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕。口径 8.6cm･器高 1.1cm。33 は体部外面から内底まで横ナデ、口径 9.4cm･ 器高 1.0cm を測る。



第 16 図　土壙墓出土遺物実測図 2· 溝 ·Pit 出土遺物（縮尺 1/3）

SK32 出土遺物（第 14 図）

土師器 蓋（34）天井部外面を平坦にし、口縁端は直線的に延び、内面に凹線をめぐらす。天井部外面はヘラ削り、体部は回転横ナデ、天井部内面はナデを施す。口径 10.8cm・器高 1.1cm を測る。**白磁** 皿（35）Ⅷ-1 で、体部中位で緩く屈曲し、直線的に延びる。内底見込みは平坦で、ヘラと櫛状工具を用いて花弁文を施す。

SK41 出土遺物（第 14 図）

土師器 小皿（36～38）底部糸切り離し、体部外面から内底まで横ナデ、口径 8.2～8.5cm・器高 1.2～1.3cm を測る。高台付小皿（39）体部外面から内底、高台内外面は横ナデ、口径 7.8cm・器高 2.7cm を測る。杯（40）底部糸切、内底まで横ナデ、口径 12.7cm・器高 3.0cm を測る。

SK43 出土遺物（第 14 図）

青磁 小碗（41）体部外面は無文、内面に片彫りで蓮華花文と葉文を入れる。龍泉窯系無文劃花文碗Ⅰ -1 を小型化したもので外形は相似形をなすが、見込みに圏線は入らない。

SK45 出土遺物（第 14 図）

青磁 碗（42）器全体を五弁花に見立てた I-4 類で、口縁部を欠失する。

SK46 出土遺物（第 14 図）

土師器 小皿（43）底部は糸切り離し、体部外面から内底まで横ナデ、口径 7.8cm・器高 1.2cm を測る。**土師質土器** 鍋（44）口縁部が短く水平に開き、体部は緩やかに内湾し立ち上がる。口縁部は横ナデ、体部外面上半ナデ、下半粗いハケ目、内面上半横ナデ、下半ハケ目。

SK47 出土遺物（第 15 図）

土師器 底部は糸切り離しによる。小皿（45～52）体部外面から内底まで横ナデ、口径 7.7～8.7cm・器高 1.3～1.6cm を測る。高台付小皿（53）・杯（54～58）体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。54～58 は口径 12.2～13.1cm・器高 2.3～2.9cm を測る。

SK50 出土遺物（第 15 図）

土師器 底部の切り離しは 65 がヘラ、他は糸による。小皿（59～66）59～64 は体部外面から内底まで横ナデ、口径 7.8～8.2cm・器高 1.1～1.5cm を測る。65 は口径 9.0cm・器高 1.6cm を測り、丸底に近い。66 は口径 8.3cm・器高 0.9cm を測り、扁平な形状を取る。杯（67～69）67 は体部が回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 12.3cm、器高 2.7cm を測る。68・69 は体部外面から内底まで横ナデ、口径 12.4・12.6cm、器高 2.4・2.6cm を測る。

SK56 出土遺物（第 15 図）

土師器 杯（70）糸切り離し、内底ナデ、口径 12.1cm・器高 2.7cm を測る。

SK58 出土遺物（第 15 図）

土師器 小皿（71）糸切り、内底まで横ナデ、口径 7.1cm・器高 1.3cm。

SK60 出土遺物（第 15 図）

土師器 杯（72）糸切り離し、内底ナデ、口径 16.3cm・器高 3.3cm を測る。

SK71 出土遺物（第 15 図）

土師器 体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。小皿（73・74）底部の切り離しは 73 がヘラ、74 は糸による。口径 8.4・9.7cm、器高 1.5・1.4cm を測る。杯（75）底部はヘラ切り離し、口径 15.6cm・器高 3.2cm を測る。

SK73 出土遺物（第 15 図）

土師器 杯（76）底部はヘラ切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 16.7cm・器高 3.4cm を測る。

SX34 出土遺物（第 15・16 図）

土師器 底部の切り離しは糸による。小皿（77～80・85）77・78 の体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 7.8・8.3cm・器高 1.0・1.4cm を測る。79・80 は体部外面から内底まで横ナデ、口径 8.5・8.8cm、器高 1.0・1.2cm を測る。85 は厚さ 1.0cm の異様に厚い底部から口縁部が短く延び、端部は細くおさめられている。口径 8.9cm・器高 1.4cm を測る。杯（81～83）81・83 は体部外面から内底まで横ナデ、口径 12.5・13.2cm、器高 3.1・2.9cm を測る。82 の体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 12.2cm・器高 2.3cm を測る。大皿（84）体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。口径 16.3cm・器高 4.0cm を測り、杯の約 1.3 倍の寸法に相当する。**瓦器** 羽釜（86）楠葉型瓦器のミニチュア鍔付三足羽釜の上部破片資料である。**白磁** 僧形人物像（87）袈裟をまとった僧をかたどった磁器質の人物像胸部断片で、右側の襟の一部に施釉された部位がみられる。**土師質土器** 鍋（88）口縁部が水平に開き、体部は緩やかに内湾し立ち上がる。底部は欠失している。口縁部から体部中位にかけては内外面とも横ナデ、体部下位外面は横方向のハケ目、内面ハケ目を施す。**瓦質土器** こね鉢（89）体部は直線的に延び、口縁部は端部が上方に突出する。外面はハケ目の上に指頭圧痕が残り、内面はハケ目を施す。

SD18 出土遺物（第 16 図）

土師器 小皿（90）底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、口径 8.7cm・器高 1.6cm を測る。

SD35 出土遺物（第 16 図）

白磁 皿（91）端反り高台付皿、体部中位の屈曲部内面に沈圏線が付く。

Pit95 出土遺物（第 16 図）

土師器 底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。小皿（92）口径 9.3cm・器高 1.0cm を測る。杯（93）口径 16.1cm・器高 3.0cm を測る。

Pit・包含層出土遺物（第 17 図） 薄く遺物包含層が残る部位があり、グリット毎に取上げた。

土師器 小皿（1～3）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底に板状圧痕が残る。1（Pit384 出土） 口径 8.5cm・器高 1.0cm、2（A-1 Ⅰ層出土） 口径 9.1cm・器高 1.2cm、3（Pit296 出土）口径 9.2cm・器高 1.0cm を測る。杯（4･5･11）底部糸切り離し、体部外面から内底まで横ナデ、4（Pit384 出土） 口径 11.8cm・器高 2.5cm、5（A-1 Ⅱ層出土） 口径 12.1cm・器高 2.8cm を測る。11 は口径 16.2cm・器高 3.7cm・底径 9.0cm を測り、器高が高く、口径に対する底径の比率が低い。底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はヘラナデを施す。丸底杯（6）底部はヘラ切り離し、体部外面は回転横ナデ、内面は平滑、外底に板状圧痕が残る。Pit140 出土、口径 15.1cm・器高 3.1cm を測る。大皿（7）底部糸切り離し、体部回転横ナデ、内底ナデ、外底に板状圧痕、口径 16.4cm・器高 2.9cm を測る。

瓦器 椀（8～10）外底部を除き内外面ともヘラ磨きされる。8（Pit84 出土）は底部を欠失する。9（Pit362 出土）は体部中位の屈曲部が肥厚し、外面は稜をなす。10（Pit151 出土）は焼成後、外底にヘラ記号を記す。

白磁 碗（12～14）12（Pit19 出土）は丸みを持った体部から口縁部が直線的に延びるⅤ -1 で、底部を欠失する。13（Pit84 出土）は口縁端部を嘴状にし、内面に櫛状工具で施文するⅤ -4b で、底部を欠失する。14（Pit225）はⅦ類で、口縁部を欠失し、内面はヘラで施文する。皿（14･15）14（Pit170 出土）は底部から内湾気味に立ち上がり、体部中位内面に段が付く。内底見込みが無文のⅧ -1'a である。15（A-1 Ⅰ層出土）は体部中位で「く」の字状に屈曲し、その内面に段が付く。見込みに花弁文をヘラ描きするⅧ -2b である。

黒釉陶器 碗（16）底部を欠失する。体部の上位で屈曲し、スッポン口の口縁部が直立して延びる。Pit06 出土。

白磁 小壺蓋（17）A-1 Ⅰ層出土。

白磁 皿（18）体部中位で屈曲し、口縁部が直線的に延びる。内底見込みに花文をヘラ描きするⅧ -2c である。A-1 Ⅱ層出土。

瓦器 小皿（19）A-2 Ⅰ層出土。

青磁 杯（20）鍔縁口縁の上面が凹面をなし、端部を上につまみ出す。丸みをもつ体部内面に凹蓮弁をヘラ彫りする Ⅲ -2b である。A-2 Ⅰ層出土。

青白磁 合子蓋（21）外面に型作りで花文を施す。A-2 Ⅰ層出土。

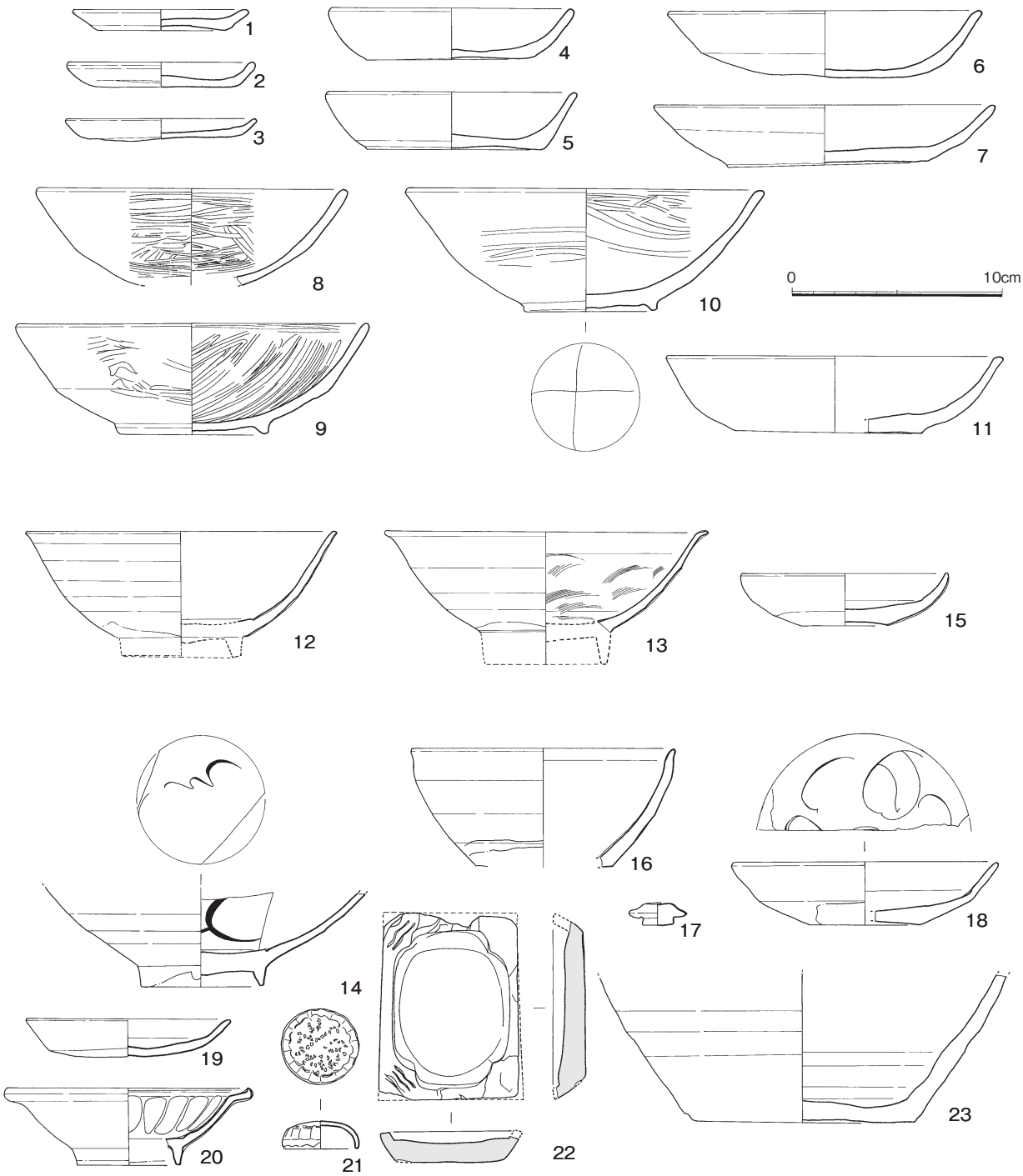
石硯（22）は全長 9.0cm、幅 7.0cm、高さ 1.5cm の長方形硯で、灰褐色を呈する。縁部の隅を木瓜形に削り出し、残存する周縁の隅には人字形の浅い彫り込みを三重に入れる。B-1･2 Ⅰ層出土。

陶器 壷（23）底部で、Pit200 出土。

土製品（第 18 図）**土錘** 管状土錘（1～10）最大径 1.0cm 前後の 1～6、1.3cm 前後の 7～10 に大別される。1 － SE01. 2 － SE04. 3 － SE06. 4 － Pit195. 5 － SK64. 6 － SE15b. 7 － SE02. 8･9 － A-1 Ⅰ層 . 10 － K-07 出土である。紡錘形土錘（11～16）最大径 1.5cm 前後の 11～14、2.0cm の 15、3.0cm の 16 に分けられる。11 － SK41. 12 － K-07. 13 － SE05. 14 － SE15. 15 － A-1 Ⅰ層 . 16 － SE16 出土である。

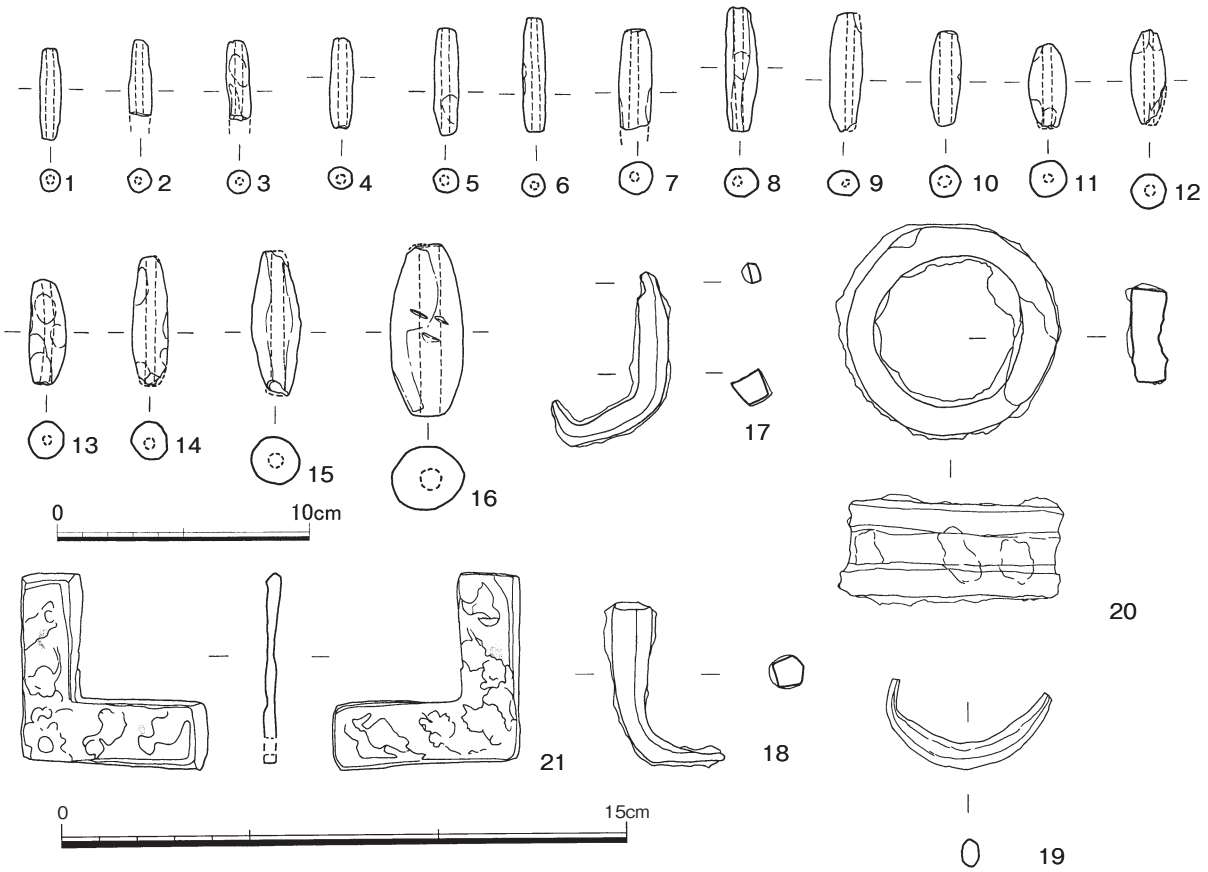
鉄製品（第 18 図）釣針（17～19）17 はチモト、針先が残存し、残存長 4.6cm を測る。Pit279 出土。18･19 は両端を欠失する。18 が SE55、19 は SE14 出土である。輪状鉄製品（20）径 5.8cm、厚さ 1.0cm、高さ 2.7cm を測り、側面に凹線をめぐらす。SE16 出土である。

銅製品（第 18 図・図版 9） 飾金具（21） 一辺 5cm の L 字形を呈し、 厚さ 2mm、 裏表とも 1～



第 17 図　Pit・包含層出土遺物実測図（縮尺 1/3）

2mm 幅で縁がめぐり、両端は三角縁に仕上げる。裏表に文様が鋳出されているが、錆が著しく不明瞭である。外側の角から 5mm に径 4mm の孔を 2 ヵ所穿つが、錆によりふさがっている。この 2 ヵ所以外に穿孔はなく、文様が両面に鋳出されていることから、飾金具の他、孔に紐を通して懸垂し、馨や風鐸の風招として用いられた可能性もある。



第 18 図　出土土製品・金属製品実測図（縮尺 1/3・1/2）

No.	登録番号	遺 構	銭 名	初鋳年	備 考	No.	登録番号	遺 構	銭 名	初鋳年	備 考	No.	登録番号	遺 構	銭 名	初鋳年	備 考
1	2	SE02	元祐通寶	1086		4	9	SE15	景禧重寶	1004		7	15	SE55	□□通□		井戸枠内
2	5	SE05	太平通寶	976		5	10	SE16	熙寧重寶	1071	折二銭	8	16	SK56	崇寧重寶	1103	当十銭
3	7	SE05	□和□□			6	13	SX34	天□通寶			9	17	A-2 Ⅰ層	崇寧重寶	1103	当十銭

第 1 表 銅銭一覧表

銅銭（図版 9・第 1 表）全体的に錆が著しく、残存状態が良好なものについてはＸ線写真で示す。判読できた北宋銭 9 点中、大銭が 3 点と高い比率を示す。

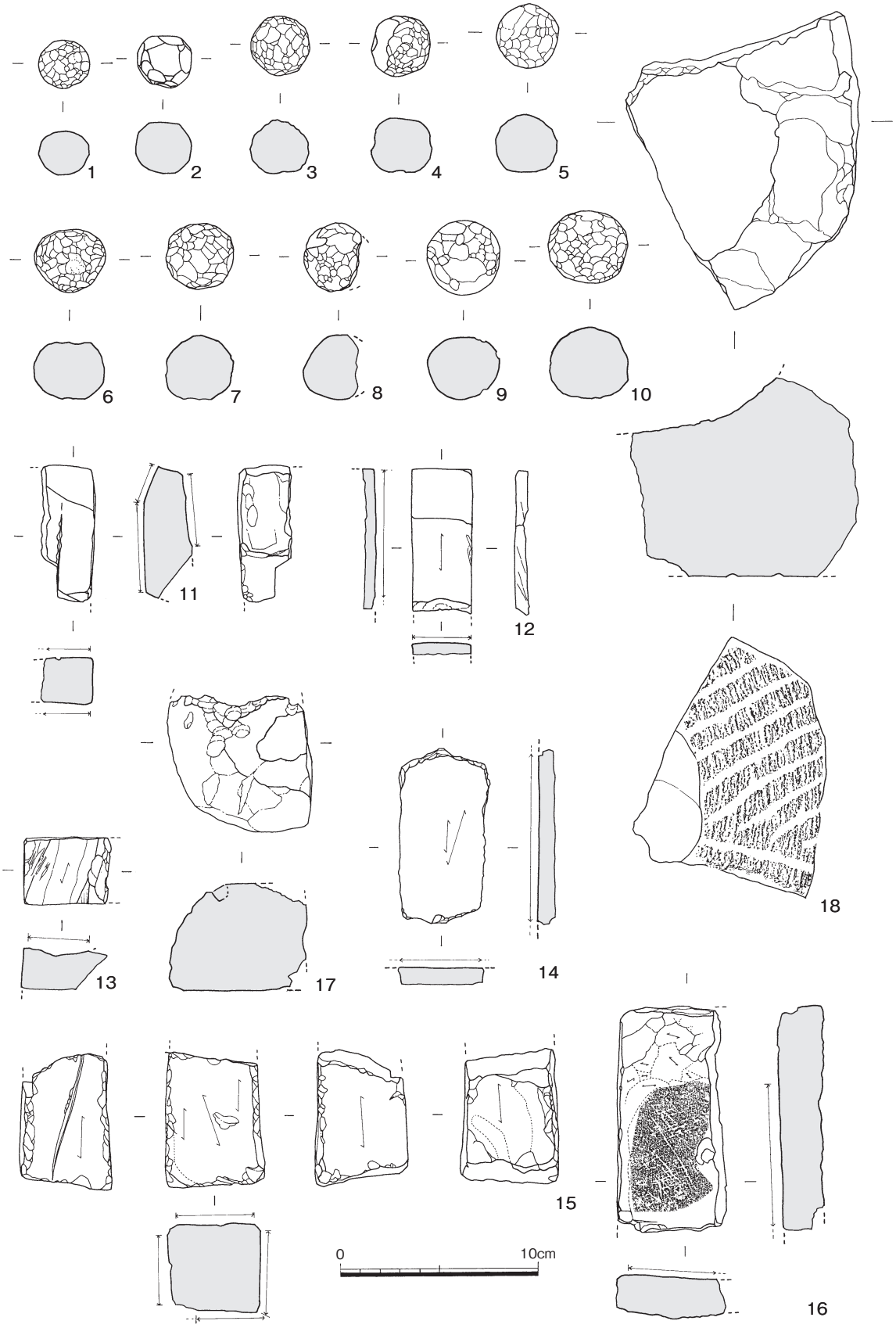
石製品（第 19 図）

石礫（1～10）径 2.2～3.6cm の球形に加工する。石材は砂岩である。1・5 － SE30. 2～4 － A-2 Ⅰ層 . 6 － SE01. 7 － SE48 井戸枠内 . 8 － SK46. 9 － SK04. 10 － SX34 出土。

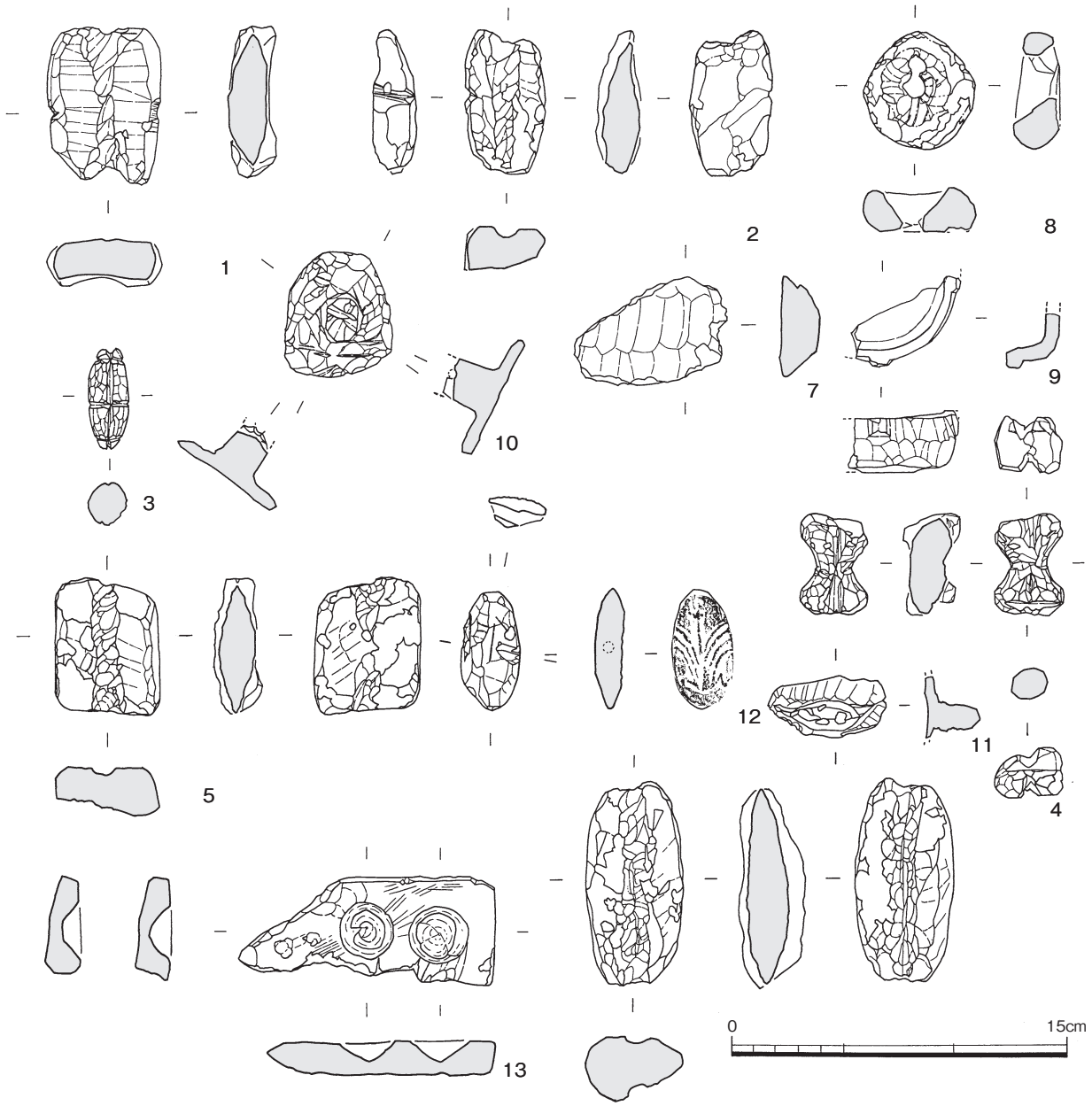
砥石（11～16）11 は残存長 7.0cm、残存幅 2.7cm、厚さ 2.4cm の砂岩製で、4 面の内 2 面が欠損、剥離し、残る 2 面は砥面である。SE33 出土。12 は残存長 7.1cm、幅 3.1cm、残存厚 6mm の粘板岩製で、上面を砥面とし、下面は剥離、両側面は研磨仕上げされているが、使用痕はみられない。SE02 出土。

13 は残存長 4.4cm、幅 3.4cm、残存厚 2.0cm の砂岩製で、上面を砥面とする。SE48 井戸枠内出土。

14 は残存長 9.0cm、幅 4.5cm、残存厚 8mm の砂岩製で、上面を砥面とし、両側面は欠損、下面は剥離している。SE04 出土。15 は残存長 7.0cm、幅 5.0cm、厚さ 4.5cm の輝緑凝灰岩製で、4 面を砥面とする。SE01 出土。16 は残存長 11.2cm、残存幅 5.5cm、厚さ 2.0cm の粘板岩製で、上面を砥面



第 19 図　出土石製品実測図 1（縮尺 1/3）



第 20 図　出土石製品実測図 2（縮尺 1/3）

とし、両側面は欠損、剥離、下面は粗く平坦面を作る。K-02 出土。

軽石製品（17）半球形に成形した製品の断片で、厚さ 5.4cm を測る。SE55 出土。

石臼（18）上臼で約 1/4 残存し、残存厚 10.0cm を測る。SE02 井戸枠内出土。

滑石製品（第 20 図）いずれも石鍋片を再加工したものである。

石錘（1～6）1～6 は有溝石錘で、長軸の両端に切り欠き、その間に溝を入れる。1･2 は側面にも切り欠きを入れる。1 は方形を呈し、全長 7.0cm、幅 5.0cm、厚さ 1.8cm を測る。SE33 出土。2 は楕円形を呈し、残存長 5.4cm、幅 3.5cm、厚さ 1.9cm を測る。A-2 Ⅰ層出土。3 は紡錘形を呈し、両端部と中間部にも長軸と直交する方向に溝をめぐらす。全長 4.4cm､最大径 1.8cm を測る。Pit08 出土。4 は中央部がくびれた糸巻き形を呈し、 全長 4.5cm、 最大幅 3.0cm、 くびれ部径 1.5cm を測る。Pit293 出土。5 は方形を呈し、全長 6.1cm、幅 4.8cm、厚さ 2.1cm を測る。A-2 Ⅰ層出土。5 は楕円

形を呈し、径 5.0cm、幅 4.4cm、厚さ 3.0cm を測る。A-2 Ⅰ層出土。

その他滑石製品（7～13）7 は断面台形に面取りされる。用途は不明。Pit357 出土。8 はすり鉢状に穿孔された円盤状石製品、径 5.0cm、厚さ 2.0cm を測る。SE55 出土。9 は口縁部に縦耳が付く石鍋のミニチュア、Pit248 出土。10･11 は石鍋補修のための鎹状石製品、11 － Pit182. 12 － SK47 出土。12 は撮みが付いた楕円形のスタンプ状石製品で、印面には草花文が刻まれる。全長 5.4cm、幅 2.7cm、厚さ 1.2cm を測る。SX34 出土。13 は火きり臼状石製品である。径 2.5cm、深さ 1.3cm の円錐形の孔を 2 ヵ所穿つ。残存長 11.4cm、残存幅 4.9cm、厚さ 1.5cm を測る。SE15b 出土。

Ⅳ 小 結

遺構の時期 今回の調査で、まとまった量の土器や陶磁器が出土し年代推定が可能な遺構は以下の通りである。

12 世紀後半～ SE28 SK11/14/60/71 13 世紀後半～ SE01/02/03/06/33 SX34 SK12/41/47/50/56/58

14 世紀前半～ SK10/46

12 世紀後半の井戸 1 基・土坑 4 基、13 世紀後半の井戸 5 基・土壙墓 1 基・土壙 6 基、14 世紀前半の土壙 2 基である。遺構が密に分布していたのは 13 世紀後半、次いで 12 世紀後半となる。

他地域から搬入された土器 SX34 から在地産のものとは大きく異なる形態をとる土師器（第 15 図 85）が出土している。口径 8.9cm･器高 1.4cm の小皿で、厚さ 1.0cm と肉厚な底部から端部を細くおさめる口縁部が短く延びる特徴をもつ。SK50 出土の土師器小皿（第 15 図 61）は厚底で、先の小皿 85 ほど口縁部は短く延びず、在地産の特徴を併せ持つ形態である。在地産と異なる広域流通品でない土器の出土は、他地域からの人の動きを示すものである。箱崎遺跡において畿内産土器は九州北部では他を圧する頻度で出土している。次いで、豊前系土師器も少なからず散見される。それ以外の地域で箱崎と深い関係をもつ地域として、薩摩・大隅が挙げられる。蒙古襲来を受けて石築地が築造されるが、箱崎地区は薩摩国御家人に石築地役、異国警固番役が割り当てられている。また、延喜式神名帳に鹿児島神社として、九州南部（日向・薩摩・大隅）で唯一の大社に列せられ、11 世紀後半には八幡正宮と称されるようになる大隅正八幡宮との関連も看過できない。九州南部の土器を広く実見した訳ではないので断定することはできないが、厚底で細く短い口縁部が付く土師器については九州南部からの搬入品である可能性が強い。

砧青磁の出土 13 世紀後半の遺構からは、博多遺跡群でも聖福寺周辺域などまとまって出土する区域が限られている希少な南宋後半の龍泉窯青磁の中でも上手物とされる砧青磁が、高い頻度でみられた。厚く施釉され、断面三角形（細めの台形）の高台先端の釉をカキ取り露胎とし、蓮弁文や高台の削りが鋭い大宰府分類でⅢ類とされるもので、体部から口縁部までゆるやかに内湾し立ち上がり、口縁部に輪花を刻む無文碗Ⅲ -1、体部外面に幅が狭い鏑蓮弁を削り出す端反りの小碗Ⅲ -2c、内外面とも無文の腰折杯Ⅲ -1a などが出土している。什器、日常生活用品とされる碗や杯の他には、鬲形香炉片、外面に八卦文を削り出す奩形香炉片が出土している。北東に近接する第 24 次調査においても、龍泉窯青磁貼付双魚文折縁盤・杯・皿など優品が出土している。13 世紀後半から 14 世紀前半にかけて、博多遺跡群や周辺の集落では当該期に位置付けされる土師器やそれらに伴う口禿白磁が出土する遺構が数多く検出されているが、砧青磁は稀で、受容層は限定されている。他に什器以外の陶磁器では、SX34 から白磁僧形人物像胸部片が出土している。信仰の対象とされたものが、破損し廃棄され

たものと考えられる。1323（至治 3）年に寧波を博多へ向け出港したものの、韓国新安沖で沈没した「新安沈船」からは 1 万 8 千点に及ぶ陶磁器、銅銭 28t、木簡 318 点などが引き揚げられている。木簡 7 点には勧進聖教仙に関する付札があり、内 1 点に「筥崎奉加銭」と記されている。このことから、寺名を記した木簡が 41 点確認されている東福寺など交易の施主となる寺社の一つとして、筥崎宮が関わっていたと推測される。「綱司」の名称を記す木簡が 109 点確認されているが、13 世紀後半から 14 世紀前半にかけての高級磁器のまとまった出土が聖福寺周辺区域などに限られることから、博多居留の宋商人を示すものとは考え難い。今回の調査を含め博多遺跡群や箱崎遺跡出土の砧青磁は新安沈船の前段階 13 世紀後半のものがほとんどであるが、この時期にも主体的に貿易に関わることにより、高級磁器など輸入品を有利に入手し、什器や仏具として使用できる立場にあったのであろう。

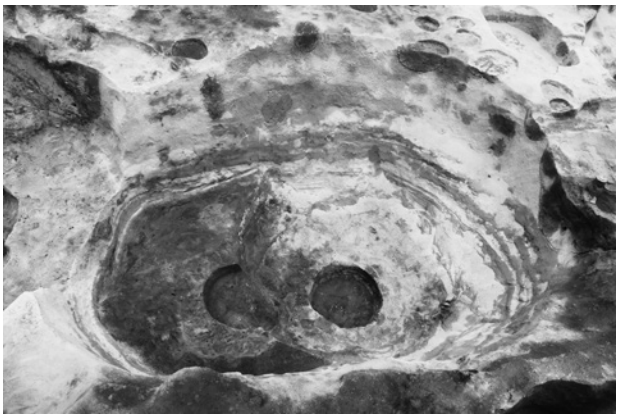
大銭の出土　新安沈船で引き揚げられた銅銭は残存状態不良なものも多く、その全貌については明らかでない。大銭と小銭の比率についても不明であるが、博多に建立された承天寺塔頭「釣寂庵」の名が記された付札木簡には大銭八貫とあり、日本では貨幣として使われなかった折二銭・当十銭といった大銭を求めている。渡来銭は貨幣としてだけではなく、銅地金としても利用されている。鎌倉大仏（吾妻鏡によると 1252（建長 4）年に鋳造が開始されたとされる）の成分分析では宋銭の成分に近い数値が得られており、銅銭を鋳潰し鋳造した説が提唱されている。寺社造営料唐船の名目である寺社造営に際しては仏具など銅製品の製作が必要であり、その材料として求めたものもあったであろう。今回の調査で判読可能な銅銭の内、折二銭の熙寧重寶（直径 3.1cm）1 点、当十銭の崇寧重寶（直径 3.4cm）2 点の計 3 点、大銭が出土している。内 2 点は 13 世紀後半の遺構から出土した。決済通貨として使用したのではなく、地金として入手したものの一部か。

石礫の出土　同時期の遺構からは土錘、石錘、釣針など漁労具の他、石礫が 10 点出土している。調査面積 500 ㎡未満では突出した出土量である。当調査地一帯、箱崎遺跡の北西側南北 300m、東西 100m の範囲では 13 世紀後半の焼土層が確認され、今回の調査では確認されなかったが、隣接する第 24 次調査などで二次被熱し焼けただれた陶磁器が数多く出土している。1274（文永 11）年の蒙古襲来による兵火の広がりを示すものであろうか。砂岩を 2.2 ～ 3.6cm の球形に加工した石製品について本来は木製の毬杖玉と報告される例もあったが、戦乱に際して用いられた殺傷力が高い投てき武器である石礫と見なす。出土状況は 1 遺構でまとまって出土したものではなく、井戸や土坑など遺構の埋土や部分的に残る遺物包含層からの出土で、出土した遺構は調査区内では偏りなく分布している。欠損した石礫もみられ、投てき後回収されることなく放置され、自然に埋没したものであろう。

町割りの復元と遺構の方位　箱崎遺跡で道路遺構の検出例は開発に伴う発掘調査がほぼ街区に限られていることもあって希少である。筥崎宮の創建以来展開されてきた町割りが現在まで踏襲され、道路に囲まれた街区内に道路遺構が延びていないことに因るのであろう。側溝など道路に付随する遺構についても、近代以降都市化の進展とともに道路が拡幅され現道内に取り込まれたためか、検出例が少ない。本市では条里遺制の景観が現在もなお残る平野部で、大規模開発や道路改良といった調査原因で現道部分の調査が可能となり、坪境の溝など条里地割りに関連する遺構が検出された例が多々みられた。道路以外に町割りの復元に資する遺構としては、街区内の区画溝や遺構の主軸方位に限られる。今回の調査で検出された掘立柱建物・溝・土壙墓など 13 世紀後半に位置付けされる遺構の主軸方位は真北から 25°東に振れ、周辺の地割の方位と同じくする。創建以来の町割りについても、南北に長い砂丘の軸線に沿った幹線道路から支道が分岐する現道に近い形態を取っていたと推測する。

1. 箱崎遺跡第 96 次 A-1･2 区全景（北東から）

2. 箱崎遺跡第 96 次 B-1･2 区全景（北東から）



3. SE06･07 井戸（南東から）

4. SE03 井戸（北西から）

5. SK11 土坑（東から）

6. SK12 土坑（東から）

図版２

1. SE15 井戸（東から）

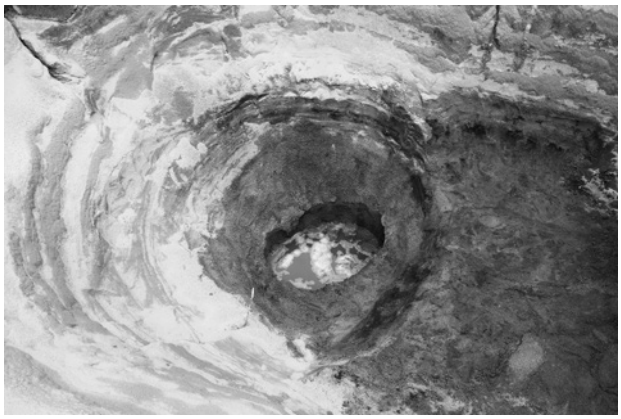
2. SE15b 井戸枠（東から）

3. SE30 井戸（北西から）

4. SE30 井戸枠（北から）

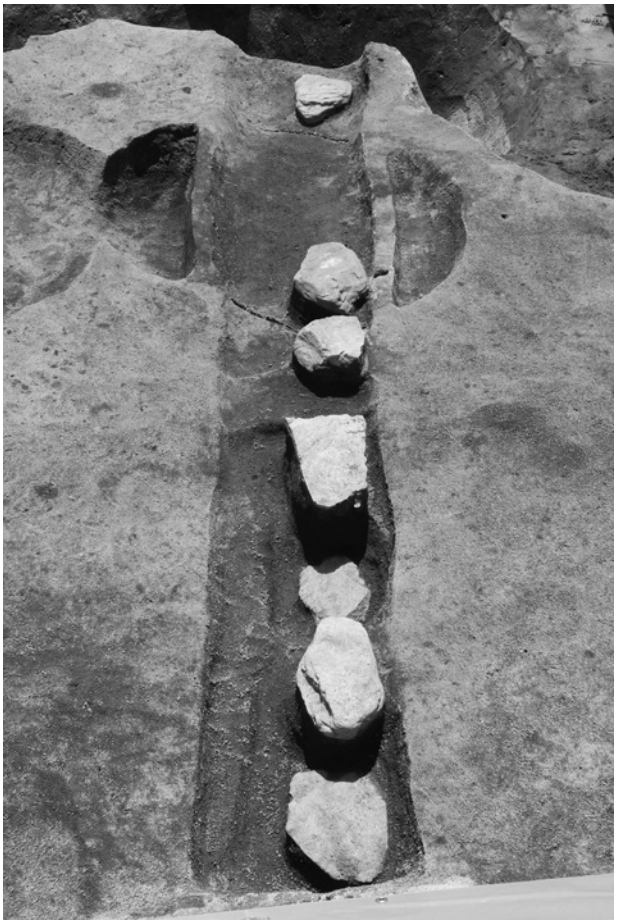
5. SE31 井戸枠（北から）

6. Pit95 土層（北から）



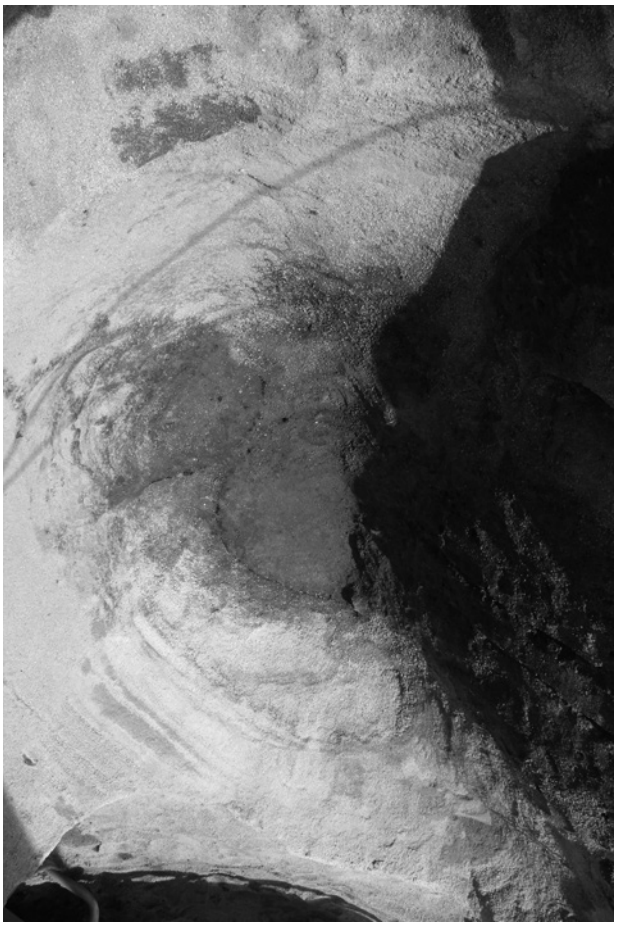
7. SE07 井戸（西から）

8. A-1 区柱穴群（南西から）



1. SA18（北西から）

2. SK14 土坑（北から）



3. SE16 井戸（北東から）

4. SK14 土坑下面（北から）

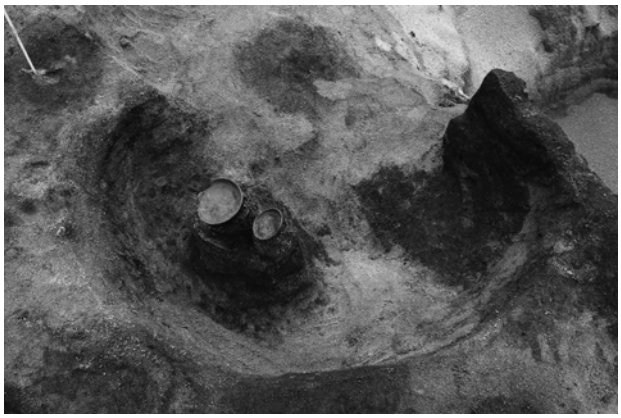
図版 4

1. SE04 井戸（北西から）

2. SE01 井戸（北西から）

3. SE06 井戸（西から）

4. SE03 井戸（西から）



5. SK10 土坑（南から）

6. B-1 区全景（北東から）

7. SE42 井戸（北から）

8. SE33 井戸（南東から）

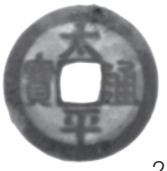
1. SX34 土壙墓（北西から）

2. SX34 土壙墓完掘状況（北西から）

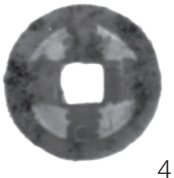
3. SE48/55 井戸（南東から）

4. SE38 井戸（南東から）

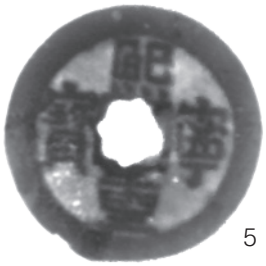
1



2



4



5

21

報 告 書 抄 録

ふ り が な	はこざき 65
書 名	箱崎 65
副 書 名	箱崎遺跡第 96 次調査報告
シ リ ー ズ 名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1458 集
編 著 者 名	佐藤一郎
編 集 機 関	福岡市教育委員会
所 在 地	〒 810-8621 福岡県福岡市中央区天神 1-8-1 TEL 092-711-4667
発 行 年 月 日	2022 年（令和 4 年）3 月 24 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
箱崎遺跡（はこざきいせき） （第 96 次調査）	福岡市東区箱崎（ふくおかしひがしくはこざき）1丁目2928番，2929番1	40131	2639	33° 35′ 42″	130° 25′ 23″	20190603 ～ 20190921	482㎡	記録保存

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
箱崎遺跡	集落	中世	井戸・土坑・溝	土師器・須恵器・陶磁器・石製品・金属製品	

要 約	箱崎遺跡は福岡平野東部、多々良川水系の宇美川河口部左岸に位置し、博多湾岸沿いに形成された古砂丘上に立地する。筥崎宮創建以降、その門前町として発展してきた。調査地は遺跡の北西、砂丘前面域の最高部よりやや下がった位置に当たる。標高 3.0m 前後の黄灰色砂上面で、12 世紀後半～ 13 世紀後半の溝 6 条、井戸 15 基、土坑 35 基、柱穴・ピット状遺構 400 個余りを検出した。溝はいずれも幅 0.3m 前後で、1 条を除き東に 30°振れた現況の町割りと同じ方位である。調査区南西隅で検出した溝は延長 9m、現況の町割り方位より 10°西に振れやや弧状に曲がる。土坑は径 1～ 2m の不整円形、楕円形のものがほとんどで、多くは廃棄土坑とみられる。その内、完形の土師器小皿・杯が数点出土した土坑が 10 基みられた。土師器の多くは生活用品で、その他神饌用とみられるものもある。柱穴・ピット状遺構は 400 個余り検出した。調査区北東と南側で密に検出された。後世の井戸や土坑等に切られ、建物や柱列としてまとめられたものは 10 棟程度にとどまる。現況の町割りと同じ方位の一群と、さらに東に 10°振れる一群とに大別される。遺構から出土した遺物の大半は土師器であるが、13 世紀後半の遺構からは博多遺跡群でも希少な南宋後半の龍泉窯青磁片が、高い頻度でみられた。

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1458集

箱崎65

－箱崎遺跡第96次調査報告－

2022年(令和4年)3月24日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8－1

印　刷　株式会社ミドリ印刷
福岡市博多区博多駅南6－17－12